大分県立埋蔵文化財センター調査報告書　第17集

豊後大野市

陣箱遺跡

（第４次調査）

－県道百枝大野線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2021

大分県立埋蔵文化財センター

豊後大野市　陣箱遺跡（第４次調査）－県道百枝大野線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－　2021　大分県立埋蔵文化財センター

陣 箱 遺 跡

（第４次調査）

－県道百枝大野線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

序　文

遺跡の所在する豊後大野市三重町は、大野川中流域にできた盆地（三重盆地）とその周辺に広がる緑豊かな地域です。その中で、陣箱遺跡のある百枝地区は大野川が作る河岸段丘が広く展開するところで、平坦面が広大に広がっています。遺跡は上位段丘上に立地し、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡と、江戸時代に遡ると考えられる道路跡が発掘されました。以前の調査によっても、この地域には大規模な弥生時代集落があることがわかっており、今回の調査でその一端が明らかになりました。江戸時代の道路跡は、この地域が道路網の一つの結節点であった可能性を示す事例となったと考えられます。

調査にあたりましては、豊後大野市教育委員会や地元の方々をはじめ多くの皆様にご協力を頂き、衷心より感謝申し上げます。また、本報告書が今後の学術研究の一助として活用されれば幸いです。

令和３年３月31日

大分県立埋蔵文化財センター

所長　松　本　昌　浩

例　言

・本書は県道百枝大野線道路改良工事に伴い、大分県豊後大野土木事務所の依頼を受け、大分県立埋蔵文化財センターが令和元年度に発掘調査を実施した陣箱遺跡の発掘調査報告書である。

・陣箱遺跡は、過去に様々な要因で豊後大野市（合併前の三重町も含む）が発掘調査を実施し、調査年次や調査地区名、調査次数で区別してきた。しかし、統一された呼称がなく、混乱するおそれがあるため、今回豊後大野市教育委員会と協議の上、調査次数で統一することにした。調査次数は、1次から3次までを豊後大野市教育委員会で実施した調査に付されているため、今回の報告分は4次調査となる。なお、次数で表す以前の調査（1次、2次調査）については、これまで通りの呼称を使用することとする。

なお、過去の調査報告書は下記のとおりである。

1次調査・・・『陣箱遺跡』　三重町教育委員会　1987

2次調査・・・『陣箱遺跡（C地区）』　三重町教育委員会　1996

3次調査・・・『陣箱遺跡（第3次調査区）』　豊後大野市教育委員会　2018

また、同一集落遺跡になると考えられる百枝遺跡と折立遺跡の報告書については下記のとおりである。

『百枝遺跡C地区　昭和59年度』　三重町教育委員会　1985

『折立遺跡』　大分県教育庁埋蔵文化財センター　2008

・発掘調査の一部について、株式会社プロレリック大分営業所に委託して実施した。

・遺物の整理（遺物水洗、接合、実測、写真撮影）については、株式会社九州文化財総合研究所に委託して実施した。

・第46図は、アジア航測株式会社の赤色立体地図作成手法（特許3670274、特許4272146）を使用し、小柳が作成したものである。

・本書の執筆、編集は小柳和宏（大分県立埋蔵文化財センター）がおこなった。

目　　次

第１章　はじめに
　第１節　調査に至る経緯と調査の経過 …… 1
　　（1）調査に至る経緯 …… 1
　　（2）調査の経過 …… 1
　　（3）調査組織 …… 1
　第２節　遺跡の立地と環境 …… 2
　　（1）地理的環境 …… 2
　　（2）歴史的環境 …… 2

第２章　調査の成果 …… 5
　第１節　調査概要 …… 5
　第２節　基本層序 …… 5
　第３節　第１調査区 …… 7
　第４節　第２調査区 …… 22

第３章　総括 …… 38
　遺構一覧表 …… 45
　遺物観察表 …… 45
　写真図版
　報告書抄録

図 版 目 次

第１図　周辺の遺跡 …… 3
第２図　陣箱遺跡の既調査区位置図 …… 4
第３図　基本層序 …… 5
第４図　遺跡全体図 …… 6
第５図　SH1 …… 7
第６図　SH1 出土遺物 …… 8
第７図　SH2 …… 9
第８図　SH2 出土遺物 …… 10
第９図　SH3 …… 11
第 10 図　SH3 土層図 …… 12
第 11 図　SH3 出土遺物 …… 13
第 12 図　SB1 …… 14
第 13 図　SK1 …… 15
第 14 図　SF1 と SF2 …… 17
第 15 図　SF1 土層図 …… 18
第 16 図　SF1、SF2 土層図（Ⅰ）…… 19
第 17 図　SF1、SF2 土層図（Ⅱ）…… 20
第 18 図　SF1、SF2 土層図（Ⅲ）…… 21
第 19 図　SF1 出土遺物 …… 22
第 20 図　SF2 出土遺物 …… 22
第 21 図　ピット出土遺物 …… 22
第 22 図　SH4 …… 23
第 23 図　SH4 出土遺物 …… 24
第 24 図　SH5 …… 25
第 25 図　SH5 出土遺物 …… 26
第 26 図　SH6 …… 27
第 27 図　SH6 出土遺物 …… 27
第 28 図　SH7 …… 28
第 29 図　SH7 出土遺物 …… 29
第 30 図　SH8 …… 30
第 31 図　SH8 出土遺物 …… 31
第 32 図　SH9 出土遺物 …… 31
第 33 図　SH9 …… 32
第 34 図　SK2 …… 33
第 35 図　SK2 出土遺物 …… 33
第 36 図　SK3 …… 33
第 37 図　SK4 …… 33
第 38 図　SK5 …… 34
第 39 図　SK6、SK7 …… 34
第 40 図　SK7 出土遺物 …… 35
第 41 図　SF3 …… 36
第 42 図　SD1、SD2 …… 37
第 43 図　その他の２区出土遺物 …… 37
第 44 図　字図と現地形比較図 …… 38
第 45 図　鹿道原遺跡遺構図 …… 41
第 46 図　大野川流域の弥生時代遺跡 …… 43
第 47 図　大野川流域弥生後期社会の構造 …… 44

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯と調査の経過

（１）調査に至る経緯

大分県土木建築部豊後大野土木事務所より、県道百枝大野線の試掘調査依頼があり、令和元年８月20日に試掘調査を行ったところ、竪穴建物と考えられる遺構が確認されたので、道路拡張部分約700㎡について発掘調査を実施することとなった。

（２）調査の経過

調査の経過については、以下のとおりである。

令和元年10月23日（水）　１区重機による表土掘削作業開始
　　10月30日（水）　作業員による遺構検出作業開始
　　11月　１日（金）　道路状遺構検出
　　11月　５日（火）　弥生時代の住居跡検出、遺構掘り下げ開始
　　11月15日（金）　１区の空中写真撮影実施
　　11月21日（木）　１区の調査終了
　　11月25日（月）　重機による１区の埋め戻しと２区の表土剥ぎ開始
　　12月　３日（火）　作業員による２区遺構検出作業開始
　　12月　５日（木）　道路状遺構検出
　　12月　９日（月）　遺構検出終了、遺構掘り下げ開始
令和２年１月10日（金）　遺構完掘写真撮影
　　１月14日（火）　重機による２区埋め戻し開始
　　１月17日（金）　すべての作業終了

（３）調査組織

調査主体　大分県立埋蔵文化財センター
調査総括　江田　豊　　大分県立埋蔵文化財センター所長
調査員　友岡信彦　　大分県立埋蔵文化財センター参事兼調査第一課長
　　横沢　慈　　大分県立埋蔵文化財センター調査第一課主査
　　土谷崇夫　　大分県立埋蔵文化財センター調査第一課主任
　　小柳和宏　　大分県立埋蔵文化財センター嘱託
（受託業者）株式会社プロレリック
調査員　川渕雅行
調査助手　村上孝司

第２節　遺跡の立地と環境

（１）地理的環境

祖母山や阿蘇山カルデラの東に広がる高原に源を発する大野川は、竹田盆地で一端集まり、そして大分県一の水量を誇る川となって、緒方盆地、三重盆地などの穀倉地帯を作りながら東流する。そして、白鹿山あたりで北に流れを変える頃には両岸が切り立った峡谷状となり、大分平野に向けて北流することになる。

遺跡の所在する豊後大野市三重町大字百枝あたりは、大野川が大きく蛇行しながら流れ、右岸に河岸段丘が発達し、その段丘上が畑作地帯となる。明治９年の百枝村は、田３１町余に対して畑１２６町余であり、水田は溜池灌漑のみの僅かな面積しかなかった。遺跡が立地するのは上位段丘上で、平坦面は幅数百ｍで長さは１.２km ほどになる。この平坦面に旧石器時代から古墳時代までの遺跡（百枝遺跡と陣箱遺跡、折立遺跡）が立地している。

（２）歴史的環境

大野川中流域には、河岸段丘や台地が広がり、旧石器時代以来人々の居住する場となった。特に旧石器時代から弥生時代にかけては遺跡の数も多く、大分県における考古学史に登場する遺跡も数多い。旧石器時代では県内では最も遺跡が集中する場所であり、百枝遺跡や津留遺跡、牟礼越遺跡、上下田遺跡、岩戸遺跡などで、県内最古の台形様石器やナイフ形石器、細石刃などが出土している。縄文時代になるとやや遺跡数は減るが、菅無田遺跡、新生遺跡、内河野遺跡などで集落跡が検出されている。弥生時代になると、また遺跡の数が増え、特に中期後半から後期にかけては爆発的に集落が広がる。この動きは古墳時代前期まで続くが４世紀の内に集落は殆ど姿を消す。その一方、三重盆地を取り囲むように前期から中期にかけて前方後円墳が６基作られるなど、生活空間の移動があったことがうかがえる。

古代になると、この地は大野郡が置かれる。郡衙あるいは「駅」などの公的施設は発掘調査では確認されていないが、三重盆地周辺に存在した可能性が指摘されている。また、天長３年の太政官符には大野郡は「騎猟の児」を直入郡とともに輩出する土地とされており、広い原野を駆け巡る騎馬の姿を思い浮かべることができる。そのような環境の中で、後の豊後武士団の中核となる大神氏が育つことになる。

中世には、豊後国守護となった大友氏の一族が、大野郡と直入郡に盤踞することとなり、戦国末期まで守護大友氏を支える中核的な地域となった。その大友氏が文禄２年に除国されると、直入郡と大野郡には秀吉子飼いの武将であった中川秀成が、海部郡には太田一吉が入り、両者は藩領を接することになる。遺跡のある豊後大野市三重町百枝は臼杵藩領、そして横を流れる大野川の対岸は岡藩領であった。

第１表　周辺の遺跡

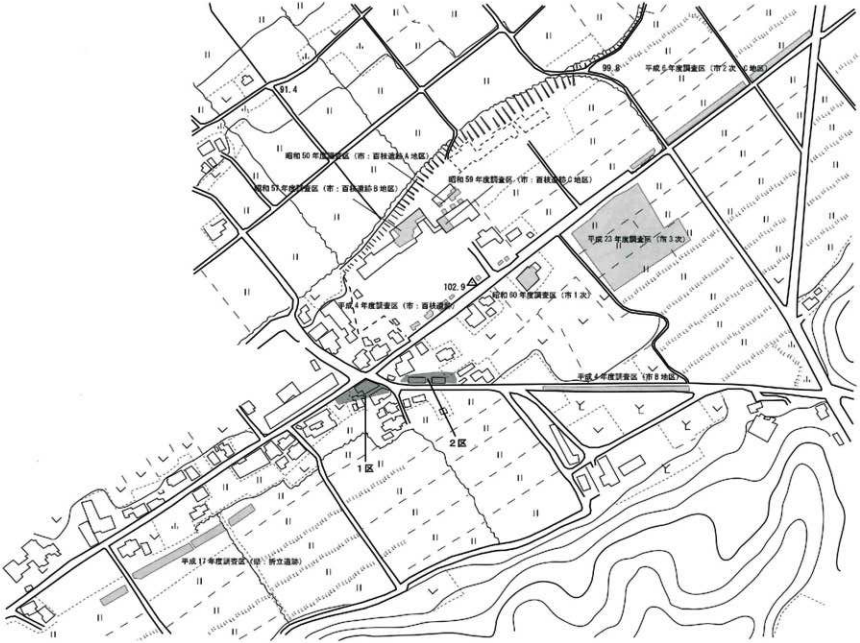
番号	遺跡名	内容	時期
001	西原遺跡群	包蔵地ほか	旧石器ほか
002	上田原遺跡群	包蔵地ほか	旧石器ほか
003	上田原東遺跡	包蔵地	旧石器ほか
004	妹ノ迫石棺群	横墓	古墳
008	立野古墳	前方後円墳	古墳
031	向野横穴古墳	横墓	古墳
032	向野遺跡群	包蔵地	旧石器ほか
033	尋土寺遺跡	包蔵地ほか	縄文後期ほか
034	法泉庵西遺跡群	包蔵地ほか	旧石器ほか
035	法泉庵遺跡群	包蔵地ほか	旧石器ほか
036	百枝小学校遺跡	包蔵地	旧石器ほか
037	**陣箱遺跡**	**集落**	**弥生・古墳**
038	大原遺跡群	包蔵地ほか	旧石器ほか
039	牟礼遺跡	包蔵地	旧石器
040	笊山遺跡	包蔵地	旧石器ほか
041	木ノ元山の麓	城跡	近世
042	牟礼ノ越遺跡	包蔵地	旧石器ほか
043	長堀久保遺跡	包蔵地ほか	旧石器ほか
064	城ヶ島古墳	横墓	古墳
065	嵯ヶ島古墳	横墓	古墳

番号	遺跡名	内容	時期
066	嵯ヶ島横穴古墳群	横墓	古墳
067	穴井横穴古墳群	横墓	古墳
068	塚原遺跡	包蔵地	旧石器ほか
069	上下田遺跡	包蔵地	旧石器ほか
070	十穴山横穴群	墳墓	古墳
071	川辺東遺跡	包蔵地	旧石器
072	川辺遺跡群	包蔵地ほか	旧石器ほか
073	岩戸原遺跡	包蔵地	旧石器ほか
074	迫横穴	墳墓	古墳
075	中五田北遺跡	包蔵地	旧石器ほか
076	中五田遺跡	包蔵地	旧石器
121	市馬遺跡	包蔵地	中世・近世
123	折立遺跡	集落	弥生・古墳ほか
140	岩戸東遺跡	包蔵地	旧石器
479	岡なまこ墓	横墓,包蔵地ほか	近世
481	中道川北遺跡	包蔵地	旧石器ほか
482	王子山遺跡	包蔵地ほか	中世
483	中道川遺跡	包蔵地	旧石器ほか
484	中道神社遺跡	神社	中世
485	中道・殿田尾遺跡	包蔵地ほか	旧石器ほか

番号	遺跡名	内容	時期
486	武北遺跡	包蔵地ほか	旧石器ほか
487	鍋遺跡	包蔵地ほか	旧石器ほか
488	熊神社遺跡	神社	南北朝
584	徳尼遺跡	包蔵地	旧石器
613	上原遺跡	包蔵地ほか	旧石器ほか
615	大木遺跡	包蔵地	弥生
616	法植寺跡	寺院跡	中世
617	原田第１遺跡	包蔵地ほか	旧石器ほか
618	中原遺跡群	包蔵地ほか	旧石器ほか
619	田原国道遺跡群	包蔵地ほか	旧石器ほか
620	八山遺跡	包蔵地ほか	中世
621	砂光寺跡	寺院跡	中世
622	新屋寺廃遺跡	包蔵地	旧石器ほか
623	新屋寺遺跡	寺院跡ほか	中世
624	為の上八社社遺跡	神社ほか	室町
625	賢龍寺遺跡	寺院跡	中世
626	原田第２遺跡	包蔵地ほか	縄文ほか
627	上門手遺跡	城館跡	中世
629	焼畑遺跡	城館跡	中世

★ 調査地点

第１図　周辺の遺跡



第2図　陣箱遺跡の既調査区位置図

第２章　調査の成果

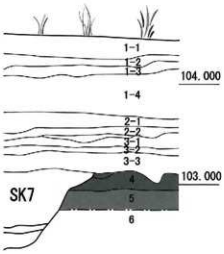
第１節　調査概要

第１区 323 ㎡、第２区 309 ㎡の合計 632 ㎡という小面積の調査ではあったが、大規模弥生時代集落遺跡である陣箱遺跡の一端を明らかにすることができた。今回の調査では、弥生時代は中期後半の花弁形住居に始まり古墳時代前期の方形住居まで、合計９基の竪穴建物を調査し、さらに１基の掘立柱建物を調査した。このあり方は、過去の陣箱遺跡の調査で明らかになったパターンとほぼ同様である。すなわち、この地には弥生時代中期後半になって、下城式土器甕を携えた人々が、花弁形住居などを利用して定着し、古墳時代前期まで居住するというものである。そして、集落内には１間×１間の掘立柱建物が建つ。このパターンは、大野川中流域の旧犬飼町、旧千歳村、旧三重町エリアに広がる標高 130m 前後の中小の火山灰台地や陣箱遺跡が立地する河岸段丘上の弥生時代遺跡に共通している。

次いで、注目されるのが中世から近世、近代にかけて使われた道路跡の検出である。大分県内では官道にかかわる古代道路や、中世大友府内町跡の戦国期の街路、さらには近世城下町の街路などの調査はあるが、山村地域の道路跡の調査は珍しい。構造的には、中世大友府内町跡で確認された、掘り込みを伴い砂利で舗装する道路跡と共通する。いわゆる「豊後大分型道路」と呼ばれる構造の道路である。

第２節　基本層序

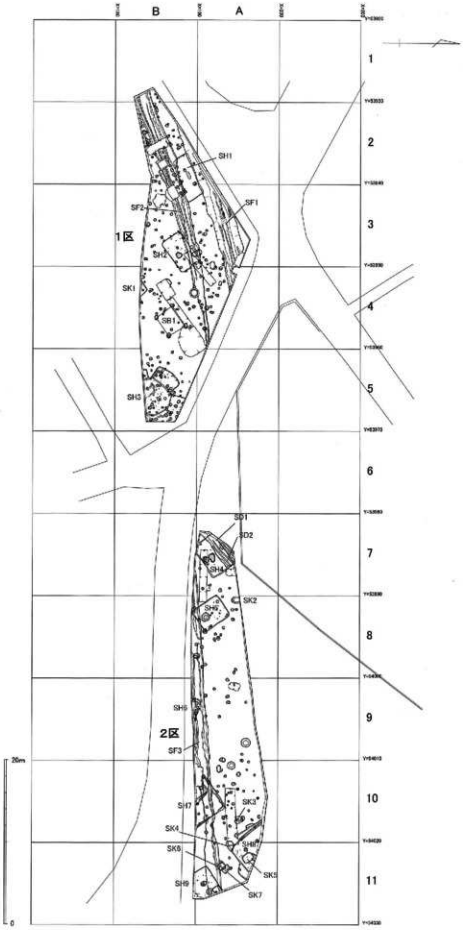
遺跡の立地する河岸段丘上の基本層序（２区東壁）は、現表土（１層）の下に茶褐色土を含む黒褐色土（２層）、黒褐色土（３層）、黒色土（クロボク土：４層）、アカホヤ火山灰混じりの黒褐色土（５層）、黒褐色土（６層）となり、その下部にいわゆるローム層（７層）が堆積する。つまり、河岸段丘の形成は、少なくとも旧石器時代終末以前とすることができる。



第３図　基本層序

大野川中、上流域にはクロボク層の発達が顕著であるが、上流域と中流域、あるいは中流域の中でも場所によりクロボク層の位置づけに違いがある。本遺跡の立地する河岸段丘上では、いわゆるアカホヤ火山灰をブロック状に含む黒褐色土（５層）の上面をクロボク層が覆っているが、同じ中流域でもやや下流の野津川（大野川の支流）流域の台地では、アカホヤを含む黄褐色土の上部に暗黄褐色土を挟んで黒色土（クロボク土）が堆積している。上流域では表土下にすぐクロボク土が厚く堆積し、その下に黄褐色土を挟んでアカホヤ層が堆積している。

今回の遺跡の調査では、遺構検出面を第１区は６層下面、第２区は５層上面でおこなった。


B
A
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
1区
2区
SH1
SF1
SF2
SH2
SK1
SB1
SH3
SD1
SD2
SH4
SK2
SH5
SF3
SH7
SK3
SK4
SK6
SH6
SK5
SH8
SK7
20m
0

第４図　遺跡全体図

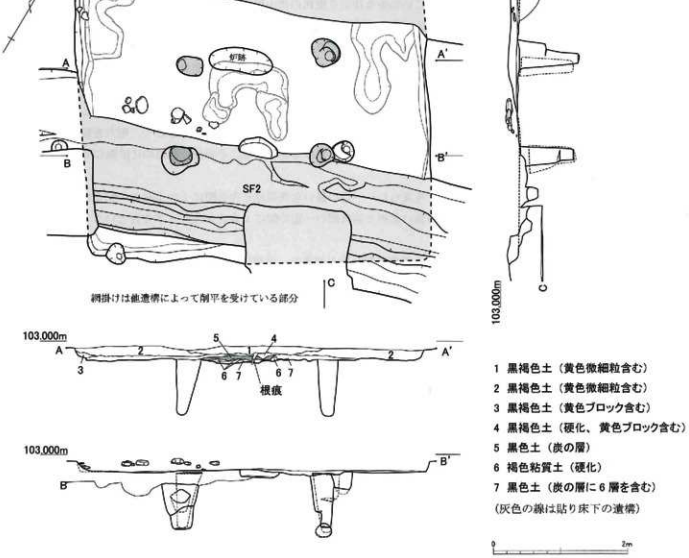
第３節　第１調査区

SH1（第５図）

調査区１の西側で確認された竪穴建物である。北側をSF1に、南側をSF2によって削られているため全形は不明であるが、東西方向は5.3mで、残存する深さは0.18mである。主柱は６本である。中央やや南寄りに炭化物が堆積した炉跡がある。

図示できる出土遺物は２点で、いずれも下城式土器甕である。第６図１は口縁下に二条の、２は一条の刻目突帯を廻らせる。口縁部は大きく開き気味で中期後半の遺物である。

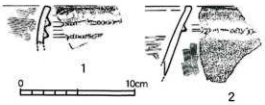
竪穴建物の時期は、６本主柱の建物であることから、出土遺物として示した中期ではなく、後期になると考えられる。ただし、下城式土器甕が後期初頭まで残るとすると、この建物の時期を後期初頭とすることができるかもしれない。



第５図　SH1

SH2（第７図）

調査区１のほぼ中央で確認された竪穴建物である。北側をSF2によって削平されている。東西方向に4.5m、南北方向に2.8mの長方形を呈する。残存する深さは0.16mである。主柱穴は東西に並ぶ２本で、柱穴の堀方は深さが1.1mとかなり深い。その主柱穴の間やや南側には炭化物が堆積した炉がある。炉は直径約1.2mの不整円形を呈し、深さは0.1m程である。貼り床をはがすと、0.1～0.15mの深さの堀方が現れ、褐色土が堆積していた。床面西側は不整形に窪みが認められた。



第６図　SH1出土遺物

図示できる出土遺物は４点である。第８図３は丸底の甕底部で、器壁はナデ調整で厚いいわゆる粗製甕である。４と５は粘板岩製の磨製石鏃である。６は安山岩製の台石で、表面の中央付近が擦られている。

この建物の時期は、丸底の甕の存在から弥生時代終末から古墳時代前期と考えられる。

SH3（第９図）

調査区１の東端で確認された竪穴建物である。当初複数の竪穴が切り合っていると考えたが、調査の結果いわゆる花弁形建物であることが確認された。約0.3m高い花弁の部分は調査区内で３カ所確認できた。全形がわかるものは１カ所で、長軸4.72m、短軸2.56mである。一段低い竪穴部分は、多角形を呈する。調査区内では４辺確認できるので、六角形の可能性が高い。そのコーナー部分にいわゆる仕切り壁状の地山堀残し部分がくるが、北側から東側に展開するものは仕切り壁状のものがなく、花弁部分が大きく展開するものと考えられ、シンメトリーにはならない。

この竪穴建物は検出時に焼土が確認でき、焼失家屋と考えられたが、掘り下げを行った結果、部分的に焼土ブロックは確認されたものの柱材などの炭化物は無く、竪穴の堆積段階で何らかの行為の結果、焼土が堆積したものと判断した。

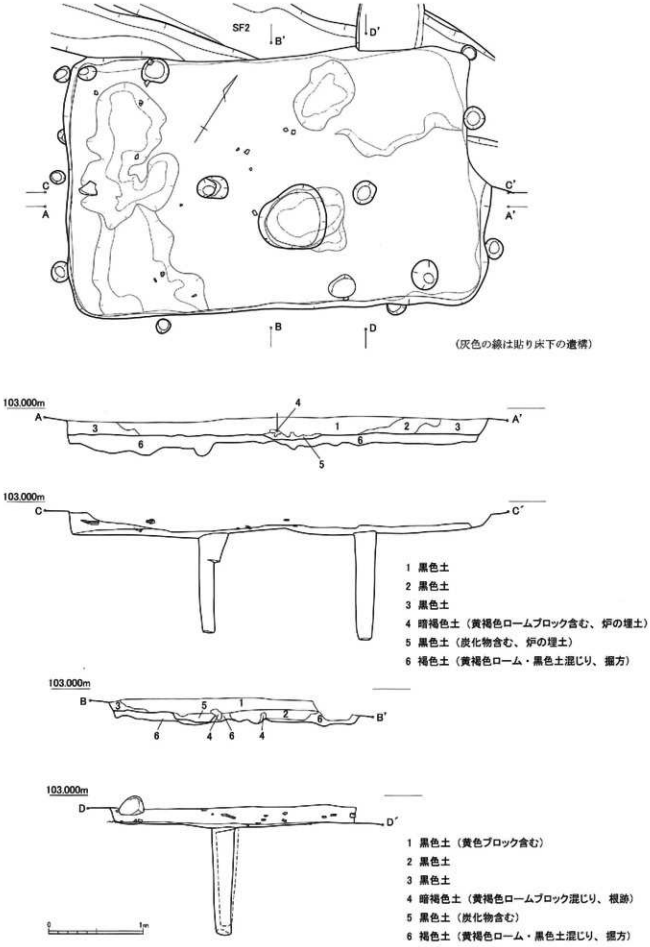
床面の貼り床を除去すると、もう一枚の床面があり、さらにそれを除去すると薄い炭化物の層が広がっていた。広がりはおおむね図に示すとおりで、炭化物層の下は被熱して若干赤化していた。このことから、竪穴を掘った後、その場で火を焚いたことがわかる。その後貼り床を行い、一度目の建物を作る。その後、最終的に拡張して２度目の建物を作ったと考えられる。

主柱穴は多角形のコーナーにある柱穴と考えられ、一辺の長い北西部はその中間に１つ主柱穴が配されている。つまり、多角形が６角形だとすると、一辺の長い北西と南東側の一辺の間に１本を加えた８本主柱ということになるっだろう。

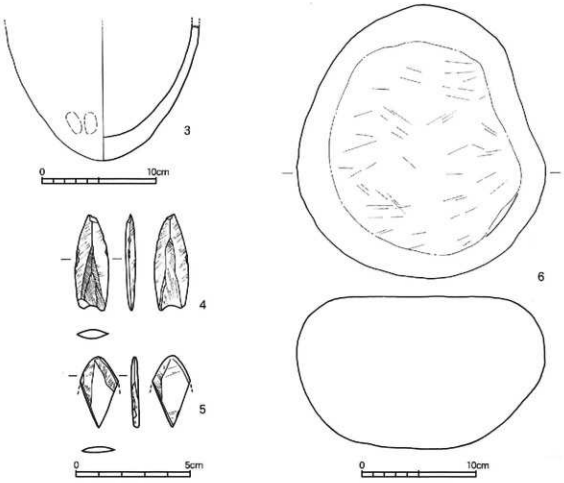
炉跡はほぼ中央部に長さ1.1m、幅0.65mの浅い掘り込みがあり、床面は被熱で橙色に硬化していた。炭化物の堆積はなかった。

図示できる出土遺物は23点である。第11図７は下城式土器の壺で、半裁竹管による重弧文が肩部に描かれる。８から13は下城式土器甕で、８と９は二条の、10から13は一条の刻目突帯文が口縁下に廻る。いずれも口縁部は外傾して開き、端部は角ばることから下城式土器甕の中では新しいタイプになる。14から16は平底をなす甕の底部で、下城式土器のものであろう。17から24は土器片加工品で、●で示した範囲はミガキ、▼で示した範囲は打ち欠いた面を残した部分、▽は欠損を表す。用途は不明であるが、一辺は直線的にするのは共通している。25から27は粘板岩の磨製石鏃未成品である。28と29は砂岩の磨石（敲石）である。磨り面を矢印で示している。30は流紋岩製の台石で、上面は使用によって平滑になっている。床面に据えられた状態で出土している。31は緑泥片岩製の打製石斧で、半分以上欠損している。

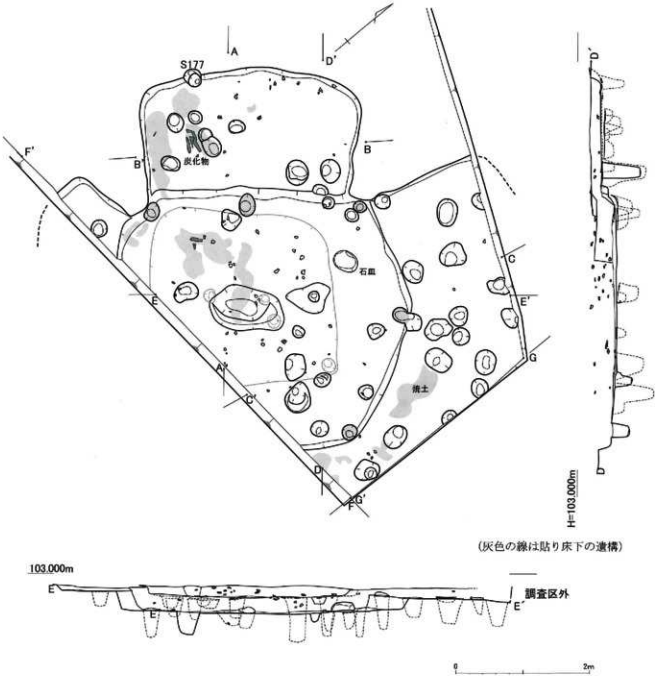
以上から、この建物の時期は弥生時代中期後半と考えられる。


SF2
B'
D'
C
A
C'
A'
B
D
(灰色の線は貼り床下の遺構)
103.000m
A
A'
4
3
1
2
3
6
6
5
103.000m
C
C'
1 黒色土
2 黒色土
3 黒色土
4 暗褐色土（黄褐色ロームブロック含む、炉の埋土）
5 黒色土（炭化物含む、炉の埋土）
6 褐色土（黄褐色ローム・黒色土混じり、掘方）
103.000m
B
B'
3
5
1
2
6
6
4
6
4
103.000m
D
D'
1 黒色土（黄色ブロック含む）
2 黒色土
3 黒色土
4 暗褐色土（黄褐色ロームブロック混じり、根跡）
5 黒色土（炭化物含む）
6 褐色土（黄褐色ローム・黒色土混じり、掘方）
0
1m

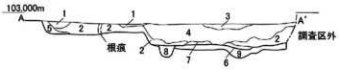
第７図　SH2



第8図　SH2 出土遺物


S177
A
A'
D'
F
F'
B'
B
炭化物
石皿
C
C'
E
E'
G
G'
D
F
備土
H=103.000m
(灰色の線は貼り床下の遺構)
103.000m
E
E'
調査区外
0
2m

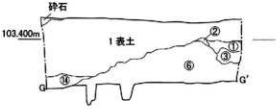
第9図　SH3



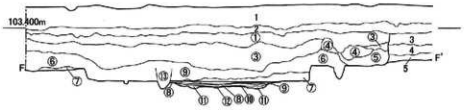
1 黒色土（黄色ブロック含む）
2 黒色土
3 黒色土（橙色焼土混じり）
4 黒色粘質土（遺物含む）
5 黒色土
6 黒色土（黄色粘質土含む）
7 明褐色土（焼土）
8 黒褐色土（焼土混じり）
9 黒褐色土（上面硬化、黄色粘質土ブロック混じり）

1 黒色土（黄色ブロック含む）
2 黒色土
5 黒色土
7 明褐色土（焼土）
8 黒褐色土（焼土混じり）

4 黒色粘質土（遺物含む）
8 黒褐色土（焼土混じり）
9 黒褐色土（上面硬化、黄色粘質土ブロック混じり）



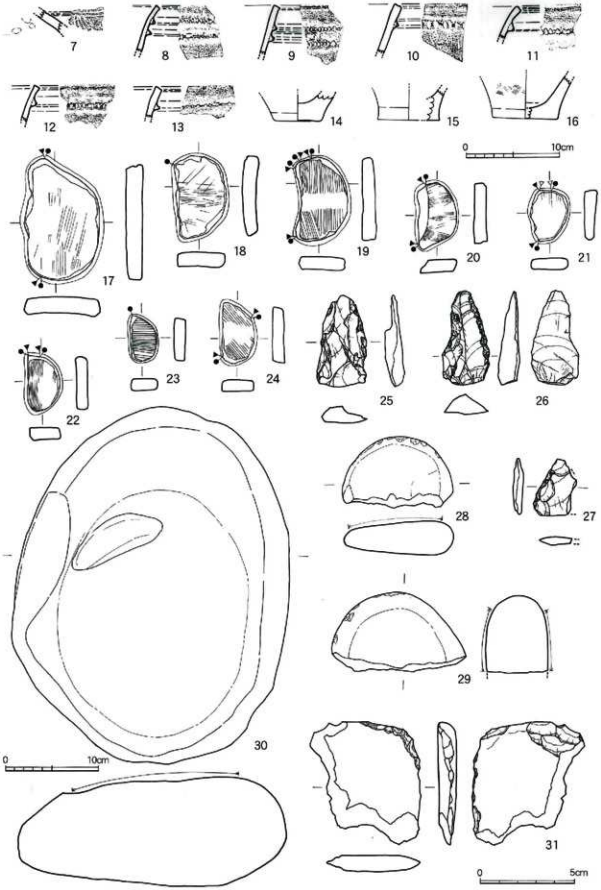
1 黒色土（表土）
2 黒色土（クロボク土）
① 黒色土
② 黒褐色土（極暗赤褐色の鉄分粒混じり）
③ 黒色土
⑥ 黒褐色土（褐色粒含む）
⑭ 暗褐色土（白色粒混じり）



1 黒色土（耕作土）
2 黒色土（クロボク土）
3 黒色土（クロボク土）
4 暗褐色土（アカホヤ層）
5 黒色土（クロボク土）
① 黒色土
③ 黒色土
④ 黒色土（暗褐色粒含む）
⑤ 黒色土（暗褐色粒含む）
⑥ 黒褐色土（褐色粒含む）
⑦ 黒色土（炭化物混じり）
⑧ 暗褐色土（第2貼床面、黄褐色硬化面）
⑨ 黒褐色土（第1面生活面）
⑩ 褐色土（第1貼床面、黄褐色硬化面）
⑪ 黒色土（炭化物層、一面に焼いた炭層）
⑫ 暗褐色土（地山層、上面被熱により赤化）
⑬ 黒色土

0 2m

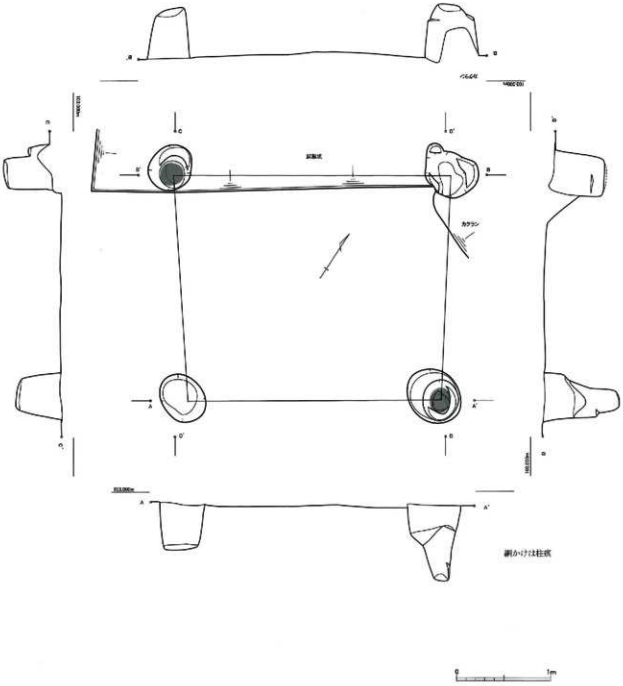
第 10 図　SH3 土層図



第 11 図　SH3 出土遺物

SB1（第 12 図）

調査区のやや東寄りで検出された掘立柱建物である。柱間は 1 間× 1 間で、2.85m × 2.3m のやや長方形を呈する。柱穴の上端はいずれも直径 0.5m 前後で、深さは 0.5 ～ 0.8m である。柱穴からの出土遺物はないが、埋土の色調から、他の竪穴建物と同一の弥生時代後期のものと判断した。

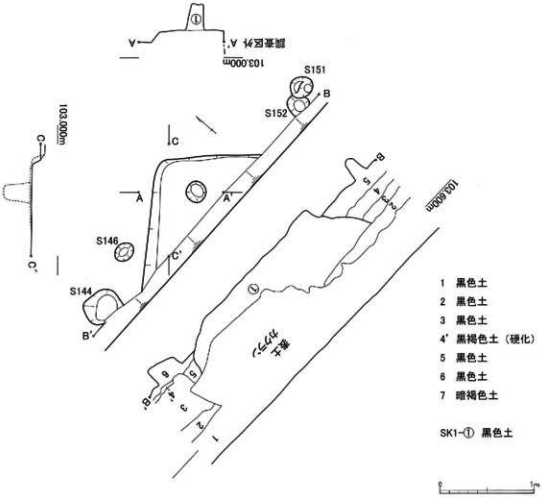


第 12 図　SB1

SK1（第 13 図）

調査区の中央東寄りの南壁際で検出された遺構である。大部分は調査区外に延びるため全形は不明である。竪穴建物になる可能性もある。深さは 0.6m である。

出土遺物はなかったが、掘り込みの層位からすると弥生時代後期から古墳時代前期のものと考えられる。



第 13 図　SK1

SF 1（第 14 図）

調査区 1 の北側で、東西に延びる道跡である。遺構検出時にローム土まで下げたため本来の幅と深さは失われているが、ローム面で上端幅 2.7m、深さ 0.85m のいわゆる箱堀状を呈し、第 15 図に示すとおり、上面まで硬くしまった砂（砂利）層と黒色粘質土の互層をなしていた。砂層の面が路面で、黒色粘質土は自然流入土と考えられる。調査区北東壁（第 16 図）を見ると、本来の掘り込み面は、ローム面より約 0.25m 上にあったことがわかる（壁が道跡に対して直行していないため、図で見える幅は本来のものではない）。そして、最終的には黒色土混じりのローム土（1-4 層）で埋め戻されているのがわかる。また、検出面からマイナス 0.4m の路面の端に礫を並べているのが確認された。

土層断面図（第 15 図）を見ると分かるように、大きく数度の掘り直しが認められる。つまり、当初周辺の土地（現地表面を基準）より約 1.6m 掘り下げて道路を構築したが、その後雨水の流入などにより黒褐色土が堆積、それを砂利で突き固めて路面とする、それが一定の高さまでかさ上げされた段階で、掘り直しを行う、という繰り返しの後、遺構検出面（現地表面からマイナス 0.7m）まで道路面が高くなっていったものと考えられる。

出土遺物は第19図32から36である。32は陶器で、内面に刷毛目で渦巻きを描く。肥前現川焼。33は肥前系陶器で、黄色の地に緑色で文様を描く。34は陶胎の染付である。35は瓦質の深鉢で、口縁下に低く細い突帯を、そしてその下位に沈線を廻らせ、その間に梅花文をスタンプする。36は鉄釘である。

以上はいずれも埋土上層から出土しており、この道路の開削が35で示される戦国期まで遡るかどうかはわからないが、少なくとも江戸後期までは機能していたと考えられる。

SF 2（第14図）

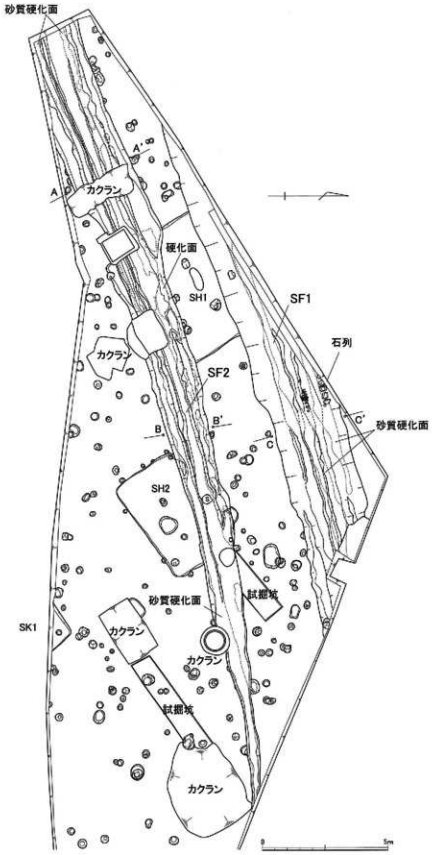
SF 1にほぼ平行し、調査区中央を東西に伸びる道跡である。SF 1と同様に遺構検出時にローム面まで下げたため本来の幅は失われたが、調査区北東壁（第17図）を見ると、本来は深さ0.45m、幅4.4mほどあったことがわかる。道路跡1と異なり、砂層は全く確認されず、西側では轍の痕跡と考えられる浅い溝が底面の両端部に見られた（第15図A断面8層と10層）。調査区北東壁（第17図）でわかるように、少なくとも一度の掘り直しを行っている（8層の堆積部分をその上部の6層、7層が切っている）。埋土は基本的に黒褐色土で、5層のみに硬化が見られた。なお、SF1との先後関係は調査区北壁の土層断面からは判断できなかった。

出土遺物は第20図37と38である。37は瓦質深鉢の底部付近で、突帯と花文のスタンプ文が廻る。38は鉄釘である。

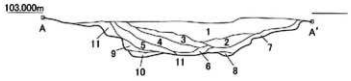
この道路の時期は、遺物が少なく決することは困難であるが、37の戦国期に遡る瓦質土器の存在は、道路の開削が戦国期まで遡る可能性を示していると考えられる。

ピット出土遺物

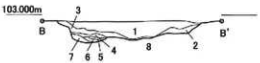
第21図39はピットから出土した黒曜石の剥片である。



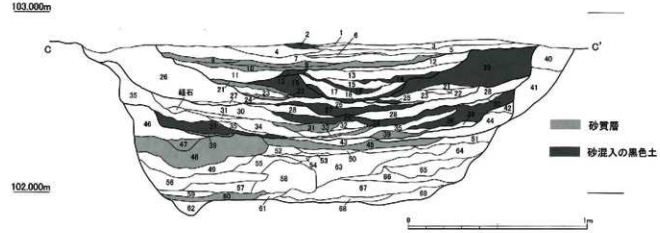
第 14 図　SF1 と SF2



1 黒褐色土
2 黒色土
3 黒褐色土
4 黒褐色土（鉄分多く含む）
5 黒色土
6 黒褐色土（鉄分多く含む）
7 黒褐色土（黄白色粘質土含む）
8 黒褐色粘質土（砂混じり）
9 黒褐色土
10 黒褐色粘質土（砂混じり）
11 褐色土（ローム混じり）

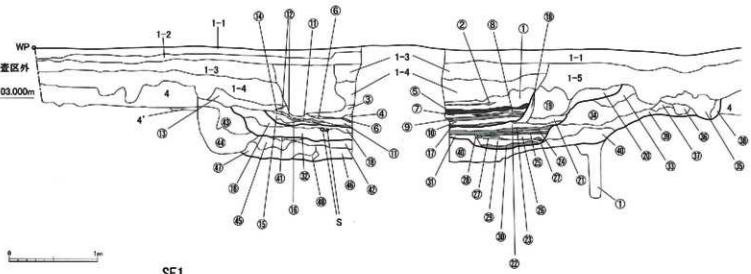


1 黒褐色土
2 黒褐色粘質土
3 黒褐色粘質土
4 黒褐色砂質土
5 暗褐色砂質土
6 黒褐色粘質土
7 黒褐色粘質土
8 褐色土



1 暗褐色土
2 暗褐色土(砂混じり)
3 暗褐色土
4 黒褐色砂質土(硬化)
5 黒褐色土
6 黒褐色土
7 黒褐色土(細粒砂少量含む)
8 黒褐色砂質土(硬化)
9 黒褐色砂質土(硬化)
10 黒褐色砂質土(硬化)
11 黒褐色土(極粗粒砂少量含む)
12 黒褐色土(粗粒砂混じり)
13 黒褐色土
14 黒褐色土(硬化、極・粗粒砂多く含む)
15 黒褐色土
16 黒褐色土(硬化、中～細粒砂含む)
17 黒褐色土
18 黒褐色土(硬化、細粒砂含む)
19 黒褐色土(やや硬化、砂・小石混じり)
20 黒褐色土(小石混じり)
21 黒褐色砂質土(硬化)
22 黒褐色土
23 黒褐色土
24 黒褐色砂質土(硬化)
25 黒褐色土(硬化、褐色粗粒砂含む)
26 黒褐色土(小礫含む)
27 黒褐色土(硬化、褐色・白色極粗粒砂多く含む)
28 黒褐色土(小石混じり)
29 黒褐色土(硬化、褐色・白色粗粒砂多く含む)
30 黒褐色土
31 黒褐色砂質土(硬化)
32 黒褐色土(やや硬化、褐色粒混じり)
33 黒褐色土(やや硬化、小石混じり)
34 黒褐色砂質土(硬化)
35 黒褐色土
36 黒褐色土(粗粒～小石混じり)
37 黒褐色土(粗粒～小石混じり)
38 黒褐色砂質土
39 黒褐色砂質土(硬化)
40 暗褐色土
41 黒褐色土(小ロームブロック含む)
42 黒褐色土
43 黒褐色土
44 黒褐色土
45 黒褐色砂質土(硬化)
46 黒褐色土
47 黒褐色砂質土
48 黒褐色砂質土(やや硬化)
49 黒色土
50 黒色土(硬化)
51 黒色土(暗褐色土混じり)
52 黒色土(硬化)
53 黒色土(暗褐色土混じり、硬化)
54 黒色土(やや硬化)
55 黒褐色土(暗褐色粒、砂混じり)
56 黒褐色土(暗褐色ブロック・粒混じり)
57 黒褐色土
58 黒色土
59 黒褐色土(暗褐色粒混じり)
60 黒褐色砂質土
61 黒色土(暗褐色粒含む)
62 褐色土(黒褐色土混じる)
63 褐色土(硬化、黒褐色土含む)
64 黒褐色土
65 褐色土(硬化、黒褐色土混じり)
66 黒色土
67 褐色土(ロームブロック含む)
68 黒褐色土(硬化)
69 黒褐色土

第 15 図　SF1 土層図

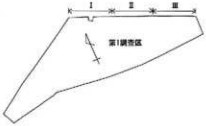


SF1

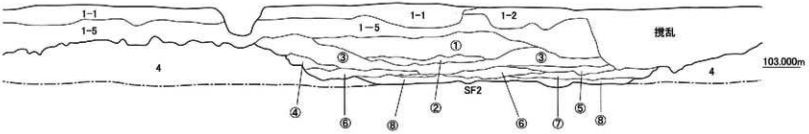
1-1 表土（砕石）
1-2 表土（遺成土 鉄クズ・プラスチック片混入）
1-3 表土（遺成土 鉄クズ・プラスチック片混入）
1-4 表土（遺成土 褐色ブロック、プラスチック片混入）
1-5 表土（遺成土 ナイロン糸・プラスチック片混入）
4 黒褐色土
4' 黒褐色土（褐色小ブロック混じり）

① 黒褐色土（白色粒混じり）
② 黒褐色土（褐色砂混じり）
③ 黒褐色土
④ 黒褐色土（褐色粒混じり）
⑤ 黒褐色土（細粒砂混じり、硬化）
⑥ 黒褐色砂質土（褐色粒砂、硬化）
⑦ 黒褐色土
⑧ 黒褐色土
⑨ 黒褐色砂質土（粗粒砂多く、硬化）
⑩ 黒褐色土（白色粒混じり）
⑪ 黒褐色土（鉄成分粒・極暗褐色土混じり）
⑫ 極暗褐色土（鉄成分 硬化）
⑬ 黒褐色土
⑭ 黒褐色土
⑮ 黒褐色土（白色粒混じり）
⑯ 黒褐色土（褐色粒混じり）
⑰ 黒褐色砂質土（硬化、白色・褐色粒混じり）
⑱ 黒褐色土（白色粒混じり）
⑲ 黒褐色土（白色粒混じり）
⑳ 黒褐色土（白色粒混じり）
㉑ 黒褐色土
㉒ 黒褐色土（白色粒混じり）
㉓ 黒褐色砂質土（硬化、褐色粒混じり）
㉔ 黒褐色土
㉕ 黒褐色砂質土（硬化、褐色・白色細粒砂混じり）
㉖ 黒褐色土（白色粒混じり）
㉗ 黒褐色砂質土
㉘ 黒褐色土（ブロック状白色粒混じり）
㉙ 黒褐色土（白色粒混じり）
㉚ 黒褐色砂質土（粗粒砂）

㉛ 黒褐色土（強白色粒混じり）
㉜ 黒褐色土
㉝ 黒褐色土（白色粒混じり）
㉞ 黒褐色土
㉟ 黒色土
㊱ 黒褐色土（褐色土混じり）
㊲ 黒褐色土
㊳ 黒褐色土（暗褐色粒多く混じる）
㊴ 黒褐色土
㊵ 黒色土
㊶ 黒色土（褐色ブロック混じり）
㊷ 黒色土（褐色ブロック混じり）
㊸ 黒褐色土（褐色・白色粒混じり）
㊹ 黒褐色土（褐色ブロック混じり）
㊺ 黒褐色土（褐色土混じり）
㊻ 褐色ブロック（黒褐色土混じり）
㊼ 黒褐色土
㊽ 褐色土（黒褐色土混じり）



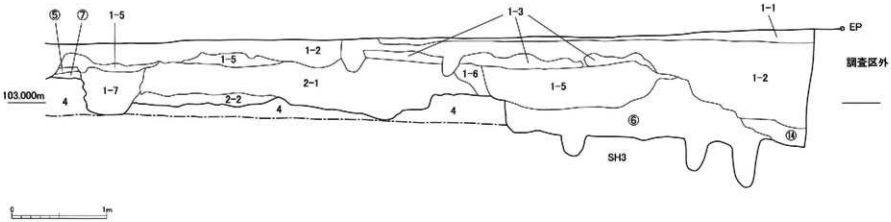
第16図 SF1,SF2 土層断面図(1)



1-1 表土（砕石）
1-2 表土（造成土 鉄クズ・プラスチック片混入）
1-3 表土（造成土 鉄クズ・プラスチック片混入）
1-4 表土（造成土 褐色ブロック多く、プラスチック片混入）
1-5 表土（造成土 ナイロン糸・プラスチック片混入）
4 黒褐色土
4' 黒褐色土（褐色小ブロック混じり ）

SF2
① 黒褐色土
② 黒褐色土（赤色粒混じり）
③ 黒褐色土
④ 黒褐色土
⑤ 暗褐色土（極粗粒～中粒砂含む、硬化）
⑥ 黒褐色土
⑦ にぶい黄褐色粘質土
⑧ 黒褐色粘質土

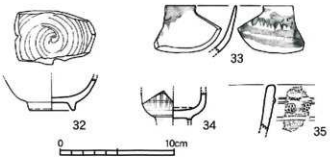
第17図 SF1,SF2土層断面図(II)



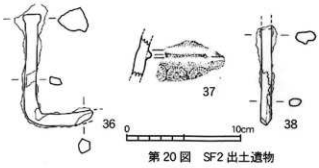
1-1 表土（砕石）
1-2 表土（造成土 鉄クズ・プラスチック片混入）
1-3 表土（造成土 鉄クズ・プラスチック片混入）
1-5 暗褐色土（表土、造成土 プラスチック片混じり）
1-6 暗褐色土（表土、造成土 褐色土混じり）
1-7 黒褐色土（表土、造成土）
2-1 黒褐色土
2-2 黒褐色土
4 黒褐色土

SH3-⑥ 黒褐色土（褐色粒混じり）
SH3-⑭ 暗褐色土（白色粒混じり）
SF2-⑤ 暗褐色土（粗～中粒砂含む）
SF2-⑦ にぶい黄褐色土

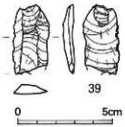
第18図 SF1,SF2土層断面図(Ⅲ)



第 19 図　SF1 出土遺物



第 20 図　SF2 出土遺物



第 21 図　ピット出土遺物

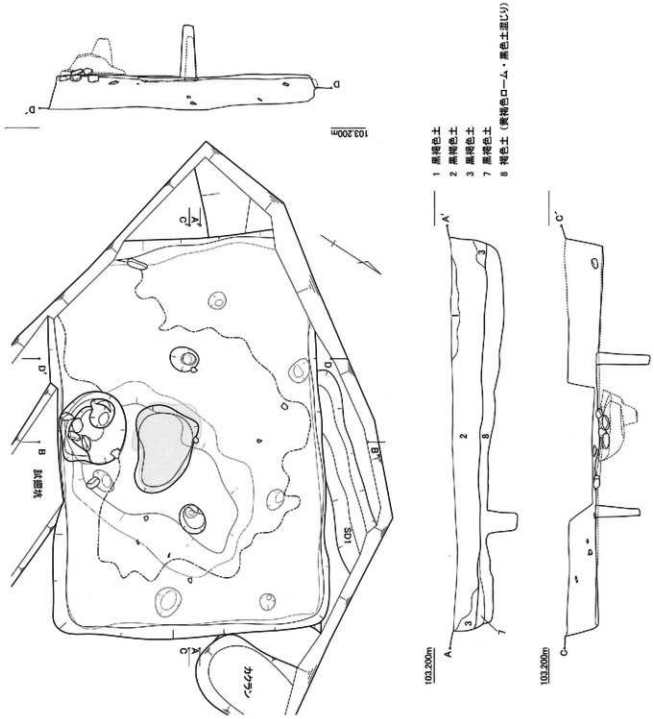
第 4 節　第 2 調査区

SH4（第 22 図）

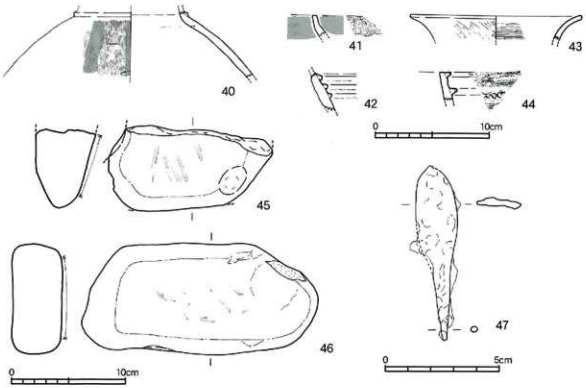
調査区の西端で検出された竪穴建物である。東西 4.6m、南北 3.2m の長方形を呈する建物で、残存する深さは 0.4m である。主柱穴は 2 カ所で、柱痕は 0.15m ほどである。貼り床下から複数の柱穴が確認されたが、この建物に伴うものであるかは判断できなかった。主柱穴の間には東西 1.0m、南北 0.6m、深さ 8cm の炉がある。炉には炭化物が堆積していたが、壁は赤化していない。炉の南側の壁際には直径 0.8m 程の土坑がある。深さは 0.28m である。床面の一点鎖線の範囲は踏み固められて硬化していた。

出土遺物は第 23 図 40 から 47 である。40 は安国寺式土器壺で、頸部には一条の突帯が廻る。外面にはベンガラが塗布されている。41 も安国寺式土器の口縁部で、櫛描波状文が巡らされている。42 も安国寺式土器の肩部で、三条の突帯が廻る。43 は大きく開く口縁部の甕である。44 は口縁端部と口縁下に刻目突帯を廻らせる下城式土器甕である。45 と 46 は安山岩製の台石で、片面に使用痕が認められる。47 は全長 9.2cm の有茎鉄鏃である。関がない木葉形である。

以上より、この竪穴建物の時期は弥生時代後期後葉から終末に位置づけることができる。


D'
D
103.200m
A
A'
B
B'
C
C'
試掘坑
SD1
ベッド
1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 黒褐色土
7 黒褐色土
8 褐色土（黄褐色ローム・黒色土混じり）
103.200m
103.200m
103.200m
B
B'
2
4
3
6
8
5
8
2 黒褐色土
3 黒褐色土
4 黒色炭
5 黒色土（炭化物含む）
6 黒褐色土（黄褐色ローム混じり、礫含む）
8 褐色土（黄褐色ローム・黒色土混じり）
（灰色の線は貼り床下の遺構）

第22図　SH4



第 23 図　SH4 出土遺物

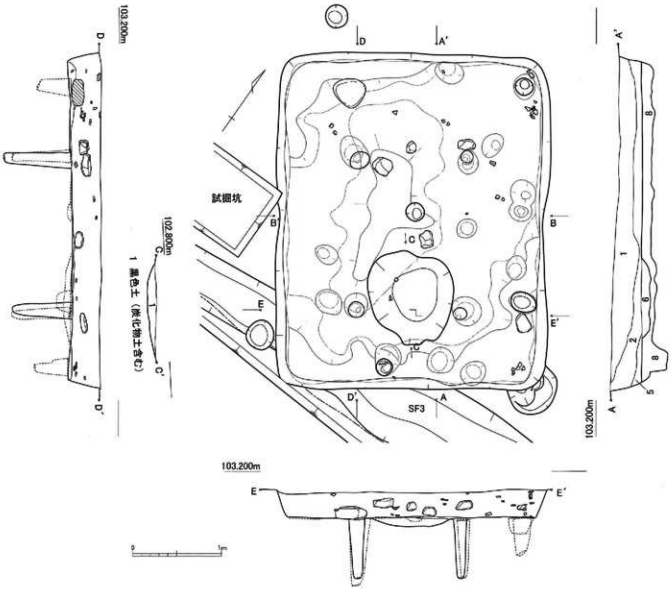
SH5（第 24 図）

調査区西寄りで確認された略東西 3.0m、略南北 3.8m の長方形を呈する竪穴建物である。残存する深さは 0.3m である。主柱穴は 4 か所で、柱痕は 15 cm程度である。南側の柱穴に挟まれた部分が炉跡で、直径 1.0m のほぼ円形を呈する。堆積土は炭化物を含んだ黒色土で、床は被熱による赤化はしていない。

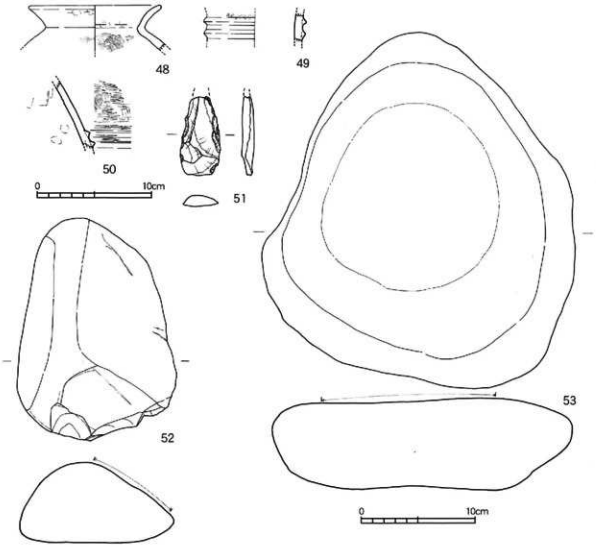
大野川上流域では長方形を呈する竪穴建物は東西方向に長いのが原則であるが、この大野川中流域では一定程度南北に長いものが存在する。その場合でも炉は南側に設置される。

出土遺物は第 25 図 48 から 53 である。48 は口縁部が「く」字形に折れ開く甕の口縁部で、球形胴になるものであろう。49 は安国寺式土器の頸部で、二条の突帯が廻る。50 も安国寺式土器で、胴部に二条の突帯が廻る。51 は粘板岩の磨製石鏃未成品である。52 と 53 は安山岩製の台石で、片面に磨り痕がある。

この竪穴建物の時期は、48 の甕が古墳時代前期のものと考えられるので、古墳時代まで下る。弥生時代後期の安国寺式土器は流れ込みであろう。


1 黒色土（細粒、黄色ブロック含む）
2 黒色土（微細粒）
3 黒色土（微細粒）
4 黒色土（微細粒、黄色土含む）
5 黒色土（地山土混じり）
6 黒色土（炉跡、埋土・炭化物土含む）
7 黒褐色土（黄色土含む）
8 褐色土（黄褐色ローム、黒色土混じり）
102.200m
B
B'
A
A'
C
C'
D
D'
E
E'
SF3
試掘坑
103.200m
1 黒色土（炭化物土含む）
102.800m
(灰色の線は貼り床下の遺構)

第 24 図　SH5

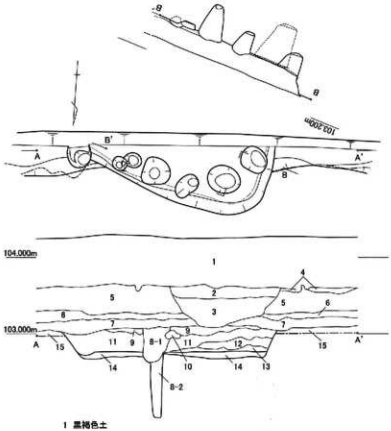


第 25 図　SH5 出土遺物

SH6（第 26 図）

調査区中央南壁際で確認された竪穴建物と考えられる遺構である。土層断面図からわかるように、この竪穴の掘り込み面は 15 層としたアカホヤを含む層である。その上層にも厚く黒色土や黒褐色土が堆積する。ピットが壁際に並んで検出されているが、この竪穴に伴うものかどうかは不明である。

遺物は第 27 図 54 である。安国寺式土器の頸部で、突帯が一条廻る。時期は弥生時代後期後葉と考えられる。



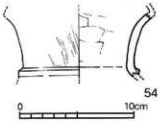
第 26 図　SH6

SH 7（第 28 図）

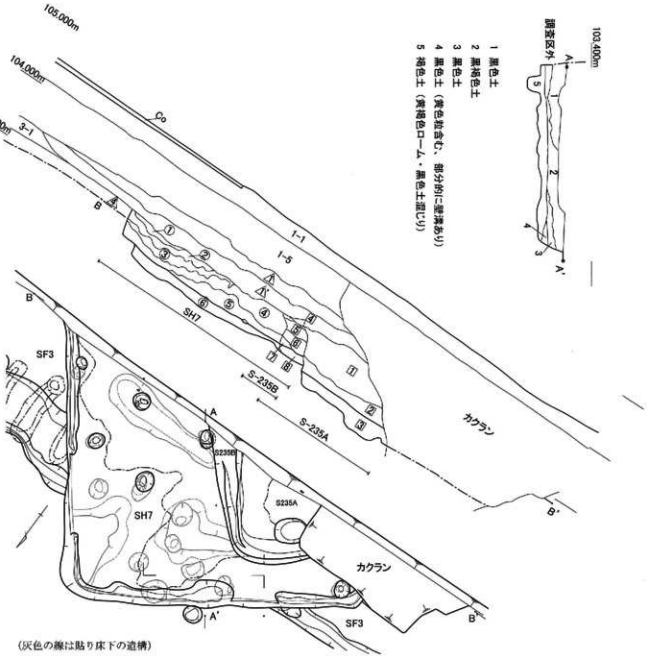
調査区東寄りの南壁際で検出された竪穴建物と考えられる遺構である。東西方向は 3.3m で、南北方向は不明である。深さは 0.3m で、床面には部分的に壁溝が廻る。二つの土坑に切られている。

出土遺物は第 29 図 55 から 57 である。55 は低い突帯を二条廻らせる壺の体部である。56 は小さな平底をなすいわゆる粗製甕の底部である。57 は玄武岩製の砥石である。上面に磨り跡がある。

この竪穴建物時期は、弥生時代後期後葉と考えられる。



第 27 図　SH6 出土遺物



(灰色の線は貼り床下の遺構)

1-1 表土
1-5 黒褐色土（近年の埋土）
3-1 黒色土
4 黒色土（クロボク土）
⚠ 黒褐色土（道路の埋土）
⚠ 黒褐色土（道路の埋土）

① 黒褐色土
② 黒色土
③ 黒褐色土
④ 黒色土
⑤ 黒色土
⑥ 暗褐色土（黒色土混じり）

1 黒褐色
2 黒色土
3 褐色土（黒色土混じり、貼り床）
4 黒色土
5 黒褐色土
6 黒色土
7 黒色土
8 暗褐色土（黒色土混じり）

0 2m

第28図 SH7

SH8（第30図）

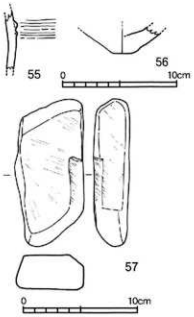
調査区東寄りの北壁際で確認された竪穴建物である。約3分の2は調査区外となる。主柱穴は2カ所確認できたので、本来は4本あるいは、竪穴の形状が南北に長くなれば6本となるであろう。床面の南側では炭化物が堆積した炉跡がある。大きさは東西1m以上となるであろう。

貼り床を除去すると、竪穴を掘削した時に生じたと思われる畝のような複数並んだ溝が壁に垂直に穿たれているのが確認できた。

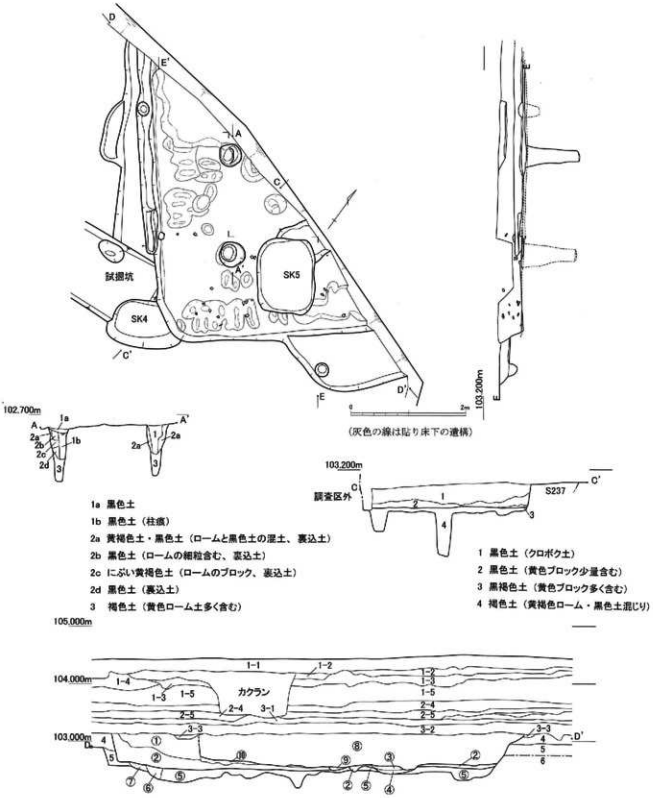
なお、調査区の土層断面を見ると、アカホヤを含む黒褐色土（第4層）から掘り込んでいるのが分かる。

出土遺物は第31図58から60である。58は口縁部上半が大きく伸びた安国寺式土器の口縁部で、外面に三条の櫛描波状文が施される。59は安国寺式土器の胴部に施された扁平な突帯で、櫛状工具による押圧の刻目が施されている。60は粘板岩製の磨製石鏃で、基部は抉りもなく直線的である。

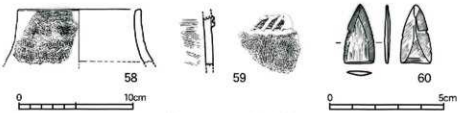
この竪穴建物の時期は古墳時代前期である。



第29図　SH7出土遺物


D
E'
A
C
試掘坑
SK5
SK4
C'
E
D'
0
2m
(灰色の線は貼り床下の遺構)
103.200m
E
102.700m
A
A'
1a
1b
2a
2b
2c
2d
3
103.200m
調査区外
C
C'
S237
1
2
3
4
1 黒色土（クロボク土）
2 黒色土（黄色ブロック少量含む）
3 黒褐色土（黄色ブロック多く含む）
4 褐色土（黄褐色ローム・黒色土混じり）
1a 黒色土
1b 黒色土（柱痕）
2a 黄褐色土・黒色土（ロームと黒色土の混土、裏込土）
2b 黒色土（ロームの細粒含む、裏込土）
2c にぶい黄褐色土（ロームのブロック、裏込土）
2d 黒色土（裏込土）
3 褐色土（黄色ローム土多く含む）
105.000m
104.000m
103.000m
1-1
1-2
1-3
1-4
1-5
カクラン
2-4
3-1
2-5
3-3
3-2
D'
1-1 黒褐色土（表土 下層に黄色砂質土、上部が炭含して暗茶褐色土になる）
1-2 黒褐色砂質土（表土 砂少量混じる）
1-3 黒褐色粘質土（表土 砂多く混じる）
1-4 砕石（表土）
1-5 暗褐色土（表土 黒灰粒の小ブロック少量含む）
2-4 黒褐色土（茶褐色土含む）
2-5 黒褐色土
3-1 褐色土（クロボク土）
3-2 黒色土
3-3 黒色土
4 黒褐色土（アカホヤ混じり）
5 黒褐色土
6 黒褐色土
① 黒色土
② 黒色土（褐色ブロック含む）
③ 黒色土（褐色ブロック含む）
④ 黒色土（炭化物混入、炉跡）
⑤ 褐色土（黒色土混じり）
⑥ 黒色土
⑦ 褐色土（黒色土混じり）
⑧ 黒色土
⑨ 黒色土（炭化物混じり、炉跡）
⑩ 黒色土（褐色ブロック含む）

第30図 SH8



第 31 図　SH8 出土遺物

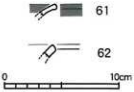
SH9（第 33 図）

調査区南東部で確認された竪穴建物である。南側と東側が調査区外のため、全形は不明である。深さは 0.2m で、北東部には南北 0.9m で、深さ 0.55m の方形の土坑があるが、調査区壁の断面図（第 33 図）からわかるように、上面は貼り床で覆われており、建物が機能していた時は方形に窪みがある程度であったと考えられる。主柱穴と考えられる柱穴は確認できなかったが、貼り床下には一カ所柱穴が認められた。

炉は貼り床下の柱穴の真上で、南北 0.7m、東西 0.5m の浅い掘り込みに炭化物が堆積しており、床は被熱を受け赤化し、硬化していた。また、一点鎖線の内側は、踏み締められ硬化していた。

出土遺物は第 32 図 61 と 62 である。61 は内外面ともベンガラが塗布された小型壺の口縁部、62 は甕の口縁部か。

この竪穴建物の時期は遺物が少なく決しかねるが、図示した 2 点は弥生時代後期のものと考えられるので、弥生時代後期としておく。



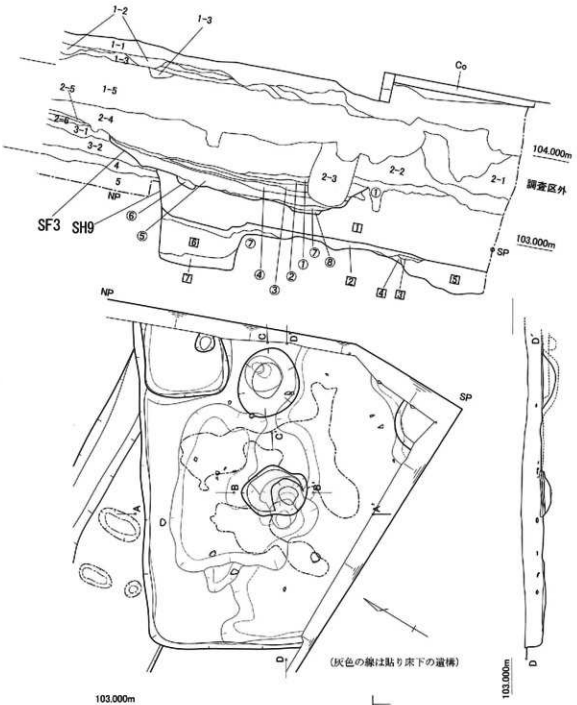
第 32 図　SH9 出土遺物

（第 33 図 土層説明）

1-1　黒褐色土（表土　下部に黄色粘質土　上部が変色して暗茶褐色土になる）
1-2　黒褐色砂質土（表土　砂少量混じる）
1-3　黒褐色粘質土（表土　砂多く混じる）
1-5　暗褐色土（表土　基灰岩の小ブロック少量含む）
2-1　黒褐色土
2-2　黒褐色土
2-3　黒褐色粘質土（にぶい黄褐色土少量混入、赤褐色粒ブロック少量含む）
2-4　黒褐色土（茶褐色土含む）
2-5　黒褐色土
2-6　黒色土
3-1　黒色土（クロボク土）
3-2　黒色土
4　黒褐色土（アカホヤ混じり）
5　黒褐色土

SF3
① 黒褐色土（黒色・赤褐色粒含む）
② 黒色土（硬化面）
③ 黒褐色土
④ 黒褐色土
⑤ 黒褐色土
⑥ 黒褐色土
⑦ 黒褐色土（硬化面）
⑧ 黒褐色土（硬化面）

SH9
⑪黒色土
⑫暗褐色土（黒色土混じり）
⑬赤褐色土（焼土）
⑭褐色土
⑮黒褐色土
⑯褐色土
⑰暗褐色土

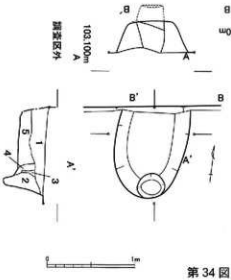

1-2
1-3
1-1
1-2
Co
2-5
1-5
2-4
3-1
3-2
4
5
NP
SF3 SH9
104.000m
2-3
2-2
2-1
調査区外
103.000m
SP
NP
SP
(灰色の線は貼り床下の遺構)
103.000m
103.000m
A
A'
調査区外
1 黒色土（微細粒、黄色土・炭含む）
2 黒色粘質土（微細粒）
3 黒褐色土（微細粒、黄色ブロック含む）
4 黒褐色土（細粒、黄色ブロック含む）
5 黒色土（炉跡残存、炭・焼土含む）
6 褐色土（黄色ローム・黒色土混じり）
102.800m
C
C'
1 黒色土（炭化物、黄色粒混じり）
2 黒色土（黄色ローム、明るい焼土粒混じり）
3 黒色土（炭化粒混じり）
4 褐色土
102.800m
B
B'
1 黒色土（炭化物・焼土含む）
2 橙色土（焼土、被熱）
3 黄褐色土（上面被熱痕あり）
0
1m

第 33 図　SH9

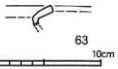
SK2（第 34 図）

調査区西側で検出された土坑である。北側は調査区外となって全形は窺い知れないが、角は丸くなる長方形の土坑と考えられる。幅は 0.7m で、深さは 0.35m である。

出土遺物は第 35 図 63 で、外面から内面の頸部までベンガラが塗布された小型壺の口縁部である。時期は弥生時代後期の前半であろう。



第 34 図　SK2

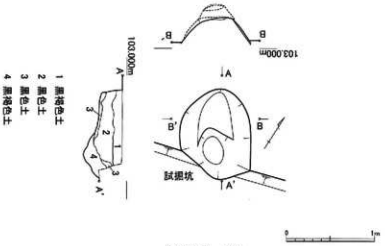


第 35 図　SK2 出土遺物

SK3（第 36 図）

調査区東寄りで確認された土坑で、試掘調査のトレンチによって一部削平されている。本来は楕円形を呈する土坑と考えられる。長さは不明であるが、東西の幅は 0.8m、深さは 0.45m である。床面は一段深い柱穴状の落ち込みがある。

出土遺物はないが、埋土の色調から弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と判断した。

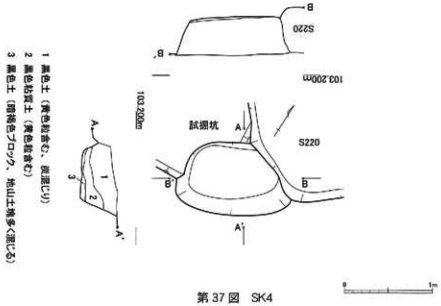


第 36 図　SK3

SK4（第 37 図）

調査区東寄りで確認された土坑で、試掘調査のトレンチによって一部削平されている。本来は東西 1.3m、南北 0.8m ほどの隅丸長方形を呈する土坑であったと考えられる。深さは 0.45m である。

出土遺物はないが、埋土の色調から弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と判断した。

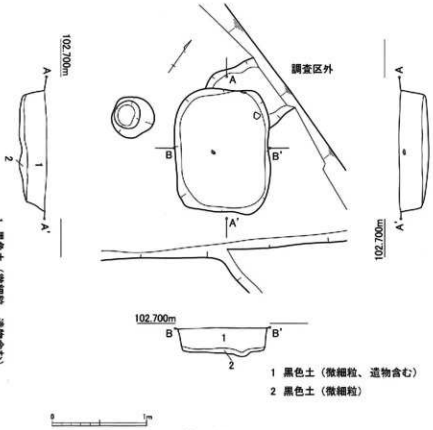


第 37 図　SK4

SK5（第 38 図）

調査区東側で、SH8 の床面で検出した土坑である。南北 1.3m、東西 0.95m の隅丸長方形を呈する土坑である。SH8 の床面からの深さは 0.3m あるので、本来は 0.9m ほどあったと考えられる。

出土遺物はないが、SH8 を切っていることと、埋土の色調から古墳時代前期の遺構と判断した。



第 38 図　SK5

K6（第 39 図）

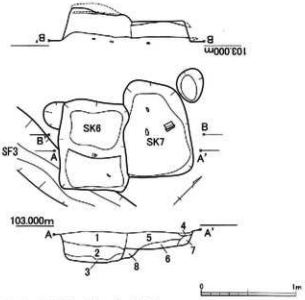
調査区東側で確認された土坑で、SK7 と並んで検出された。切り合い関係は微妙であったが、SK7 を切っていると判断した。大きさは略南北 0.9m、略東西 0.7m の長方形を呈し、深さは 0.3m である。

出土遺物はないが、埋土の色調から弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と判断した。

SK7（第 39 図）

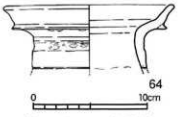
調査区東側で確認された土坑で、SK6 と並んで検出された。SK6 に切られていると判断した。大きさは略南北 1.0m、略東西は 0.65m で、深さは 0.18m である。

出土遺物は第 40 図 64 である。口縁部が開く二重口縁壺で、口縁部の境には断面三角形の突帯を付す。焼きが硬質である。通有の二重口縁壺であると頸部が直立、またはやや外傾しながら立ち上がるが、この 64



第 39 図　SK6、SK7

は内傾している。古墳時代前期の所産であろう。



第 40 図　SK7 出土遺物

SF 3（第 41 図）

調査区 2 で南辺に沿うように確認された道路跡である。遺構検出面はアカホヤ層であったため、平面的な確認は下部しかできなかった。東壁の土層（第 33 図上側）によると、道路の掘り込みは幅 2.9m、深さは 0.4m である。浅い皿状の掘り込みで、底面はほぼ水平である。断面（第 33 図）を見るとわかるように底面には 3 カ所の窪みがある。両側の 2 カ所は道路面に 2 本の溝として刻まれているもので、真ん中の窪みは、道路に垂直に掘られたいわゆる「連続不定形土坑」である。道路面に掘られた 2 本の平行する溝は、道路跡 2 でも確認されている轍の跡と考えられる。「連続不定形土坑」は道路跡 3 のみで確認された。長さ 1.3m で幅 0.3m、深さ 0.1m ほどの土坑が連続して 8 箇所掘られている。

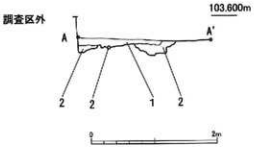
さらに、土層断面からは皿状の掘り込みがほぼ埋まりかかった段階で、2 枚の硬化した路面が確認できた。

遺物は全く出土せず、時期の決定は困難であるが、道路跡 3 が道路跡 2 と繋がるものであれば、江戸時代まで遡る可能性がある。

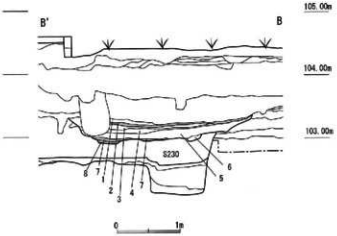
SD1、SD2（第 42 図）

調査区の西端で確認された平行する 2 本の溝である。SD1 は幅 0.4 ～ 0.6m、深さは約 0.1m で、西側で途切れている。SD2 は幅 0.4 から 0.5m、深さは約 0.1m で、西側では途切れているが、上部が削られてものと考えられる。この位置には、旧字図で確認できる道があった場所であり、方向もそれて一致するので、道路側溝や轍などの道路遺構、あるいは道路に規制された何らかの遺構と考えられる。

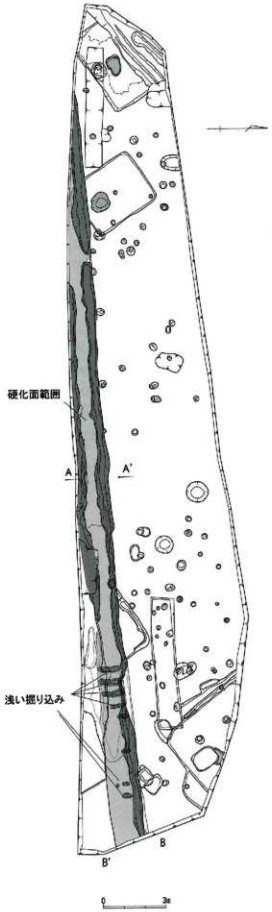
遺物の出土はなく時期は不明である。



1 黒色粘質土（炭の粒含む）
2 黒褐色粘質土



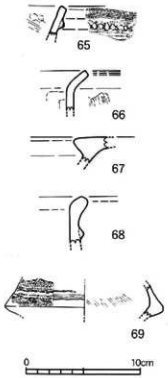
SF3
1 黒褐色土（黒色・赤褐色粒含む）
2 黒色土（硬化面）
3 黒褐色土
4 黒褐色土
5 黒褐色土
6 黒褐色土
7 黒褐色土（浅い掘り込み）
8 黒褐色土（浅い掘り込み）



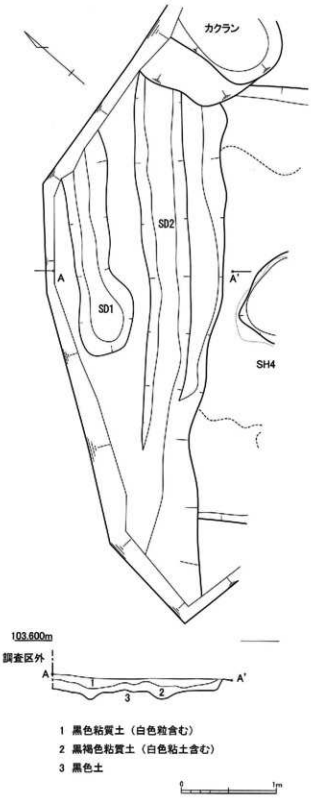
第41図 SF3

第43図65はピットから出土した一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕である。66もピットから出土した、口縁部を「く」字状に折る甕の口縁部である。

67から69は遺構検出時に出土した土器である。67は口縁部が嘴先状を呈する広口壺の口縁部である。須玖式土器の形状であるが、胎土は在地と考えられる。68は胎土に角閃石や石英を多量に含むいわゆる粗製甕で、一条の突帯が廻る。69は安国寺式土器の口縁部で、櫛描波状文を施す。



第43図　その他の２区出土遺物



第42図　SD1、SD2

第3章　総括

今回の調査では、弥生時代中期から後期の竪穴建物9基、掘立柱建物1基、中世から近代にかけての道路跡3本などを調査した。ここでは道路跡と弥生時代の集落の意義についてまとめておきたい。

道路跡について

道路跡は、第1調査区で平行する2本、第2調査区で1本の、計3本が検出された。第1調査区のSF1とSF2は、出土遺物や埋土の状況から判断して、SF1が新しくてSF2が古い。SF1は、ロームブロック混じりの黒色土で埋め戻された状況を呈しており、上層から出土する遺物も近代のものである。一方、SF2は、出土遺物は少ないものの、明らかに近世以降のものを含まず、16世紀に機能していた可能性は高い。また、第2調査区のSF3は、出土遺物が無く、時期を決めることはできない。

そこで、時期を考えるために、SF1が機能していたであろうと考えられる明治中期段階の土地台帳付属地図（以下では「字図」と呼ぶ）と、現在の地図を重ねてみた。それが第44図である。明治21年に調製された字図は、600分の1スケールで作られるが、測量の正確さにかける部分があって、字図ごとに貼り合せるとゆがみが生じる。当然、現在の正確な測量図とも合わないところが出てくるため、第44図も若干のズレがあり、正確性は低いという前提で参考程度に見ていきたい。

第44図　字図と現地形比較

そこからは、第１調査区と第２調査区で、それぞれ SF １と SF3 にほぼ重なる形で道があったことがわかる。一方、SF2 に該当する道は描かれていない。さらに、SF1 の道の北側には明治 21 年段階で幅の広い新たな道が通じており、SF １の機能がこの段階では失われつつあったことがわかる（地筆としては残っていたので、字図には描かれたと解釈できる。）。そのことがローム混じりの黒色土で埋め戻された要因と考えられよう。SF ３は、幅 2.9m の皿状の掘り込みを伴う道路であるが、上層は黒褐色土で覆われており、SF １の在り方とは異なる。明治 21 年の旧字図では、細い道路を南側に拡幅したことがわかる（明治 21 年以降の追記）が、SF3 との関係は調査区内の土層からだけでは読み取ることができなかった。SF ３が旧字図に描かれた道そのものであったのか、その前身のものであったのかは不明とせざるを得ない。

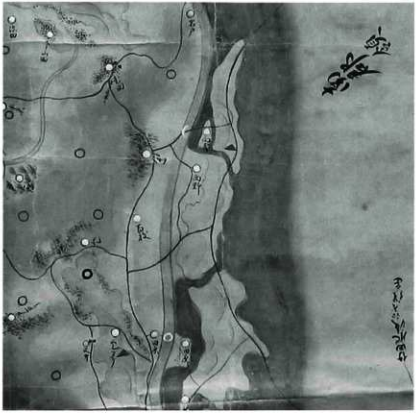


写真１　臼杵藩領絵図（臼杵市所蔵）

第 44 図は、字図から復元される主要な道を示したものである。これから、今回の調査地が、道路の結節点であったことがわかる。つまり、旧百枝村や旧西泉村の住民が何処かへ行こうとすると、この交差点に一度出ることが必要になる場合が多いということである。ところで、17 世紀の中ごろに描かれたとされる「臼杵藩領絵図」の「百枝」付近を拡大したのが写真１である。「百枝」の表記のやや下側に、二つの三差路が描かれている。第 44 図に示したａとｂの三差路がそれに該当するものであろう。そうであれば、「清川」方面からａとｂを通り、調査区の交差点を通って「田原」方面へ抜ける道があり、それに対してａで「三重町」方面へ行く道が、ｂで「向野」方面（その先は岡藩領となる）へ行く道が枝分かれしていたことになる。つまり、今回の調査対象となった結節点は、臼杵藩内における主要道路の一つであったということである。そして、その道の始原が、少なくとも SF1 と平行関係を持つ SF2 に示されるように戦国期まで遡る可能性が高いことを確認できたことは今回の成果である。戦国期には、この地域（現在の竹田市から豊後大野市）は「南郡」と呼ばれ、大友氏の有力な一族であった志賀氏が日向国境の防備を担っていた。天正 14 年に日向国境の桜峠を越えて豊後に侵攻した島津軍は、三重の松尾城に入る。それは三重が、当時の豊後の二大都市であった府内にも臼杵にも通じていたことが大きかったと思われる。三重はそれほど日向国境を考えた場合に重要な地点であった。

なお、SF1 についてはいわゆる「豊後大分型道路」との関係が注意される（註 1）。SF2 や SF ３では砂利層と黒色粘質土層との互層は確認されなかったが、いずれも地表面を大きく掘り下げて道路面を構築している。このことは、現在でも特に台地上の畑地帯や傾斜のある山では普通に見られるもので、おそらく水の流れを制御する役割も付与されているものであろう。「豊後大分型道路」にどのような性格があるのかは分からないが、陣箱遺跡の立地する河岸段丘の平坦面において、地表から大きく掘り下げられた道には雨水が流れ込んだことであろう。その結果、周辺の畑や屋敷に水が溢れるのを防ぐことに繋がったと考えられる。

陣箱弥生時代集落の規模

陣箱遺跡は、周囲を百枝遺跡や折立遺跡と接しており、弥生時代から古墳時代前期に限って言えばこれらは一体的な遺跡として捉えるべきものである。そうすれば、当該時期の竪穴建物が確認されているのは、大野川の上位河岸段

丘上の少なくとも北東から南西にかけて約700m、幅約200mの範囲にわたるものと想定できる。時期は多くが弥生時代後期であり、おおよそ200年間の存続期間ということになる。諸岡は、この陣箱遺跡周辺の弥生時代集落の広がりを20haほどと見ており、そこに数百基の建物が建っていたと想定する（註2）。諸岡によると、周辺でこれまで実質約6650㎡の調査で91基の竪穴建物を調査しており、そうすると約73㎡に1基という計算になる。これは今回の調査でもほぼ当てはまる(630㎡で9基なので、70㎡に1基となる)。仮に20万㎡であったとすれば2,800基近くとなり多すぎるが、台地を横断して調査した諏山遺跡（中津市）などでは、同じ平坦面上でも竪穴建物が全くない地点も多く、陣箱遺跡も当然ながら分布に精粗があったであろう。しかしながら、現在までに調査された箇所を見ても、ほぼ均等に竪穴建物が分布している様相が見えるので、少なく見積もっても2,000基近い竪穴建物が存在するのではなかろうか。ほぼ弥生時代中期後半という一時期の集落であった四日市遺跡（玖珠町）では、約10万㎡で150基近い竪穴建物が発掘されている。ほぼ切り合い関係が無いことから1世代か2世代と考え存続期間を50年とすると、陣箱遺跡の250年に換算すると150基×5＝750基となり、面積を陣箱遺跡に合わせて2倍にすると1,500基となる。このことから考えても、2,000基という数字は特に大きな数字ではないことになる。

大分平野の拠点集落である雄城台遺跡は、台地平坦面が約40,000㎡で、その内調査した面積が合計約4000㎡、調査した竪穴建物の数が100基なので、40㎡に1基ということになり、台地全体では約1,000基になる計算である。ほとんどの竪穴建物の時期が弥生時代後期中ごろから古墳時代初頭という時期であり、直接的な比較はできないものの、陣箱遺跡の大きさが際立つ。

つまり、この陣箱遺跡は大分県内でも有数の大集落を形成していた可能性が高いと考えられるのである。この大野川中流域でほぼ集落を全掘した鹿道原遺跡（豊後大野市千歳）では、45,000㎡で237基の竪穴建物が検出されている（190㎡に1基）が（註3）、時期は一部に中期後葉～末も含むが、基本的には後期中ごろから古墳時代前期と、陣箱遺跡に比べ限定的である。中期後葉～末から古墳時代前期まで、ほぼ途切れることなく存続する陣箱遺跡は拠点的集落とするのに相応しい遺跡である。大野川支流の三重川流域になる三重盆地（豊後大野市三重町市場など）やそこを見下ろす三重原（豊後大野市三重町赤嶺など）などの様相がほとんど分かっていないので（註4）、陣箱遺跡クラスの遺跡があるのかどうかは不明であるが、少なくとも大野川中流地域では陣箱遺跡が拠点集落だったと考えても良いのではなかろうか。そこから見えてくるものは、一時期に100基を優に超える数の建物が建ち並んでいたであろう集落を支える生業の安定性である。畑作と狩猟に大きく依存していたのは間違いないが、その場合、竪穴建物周囲での煙作とともに、水田のような広がりを持った畑地の展開が必要だったのではなかろうか。陣箱遺跡では、上位段丘上に集落が展開するが、下位段丘上や氾濫原の広大は平坦地がその候補になるだろう。

集落の構造

今回の調査は幅約10mの道路拡幅部分の調査だったことがあり、集落構造に言及できる資料を得られたわけではないが、同じ陣箱遺跡の第3次調査の結果をもとに、陣箱弥生集落の構造について見てみたい。

この大野川中流域（註5）は、特異的に1間×1間の掘立柱建物が多く見つかる。その範囲は、旧千歳村、旧三重町のエリアにほぼ限定される。どうしてこのエリアにだけ、このような施設が集中的に築かれるのかは明確な答えはないが、倉庫だとしたら、やはり物資の集中的管理が行われたことを前提にしなくてはならないだろう。鹿道原遺跡では、竪穴建物237基に対して221基の掘立柱建物が見つかっている（竪穴建物の時期は一部中期末も含むが、大部分は後期中葉から古墳時代初頭である。）。つまり、竪穴建物1基に掘立柱建物1基ということになる。しかしながら、分布をみると、竪穴建物に隣接して掘立柱建物があるように見える部分もあるが、多くは掘立柱建物が重なり合って、あるいは列をなして並んでいる。このことは、各竪穴建物に掘立柱建物が付属するのではなく、集落単位で多くの掘立柱建物が共有されていたと想定させる。

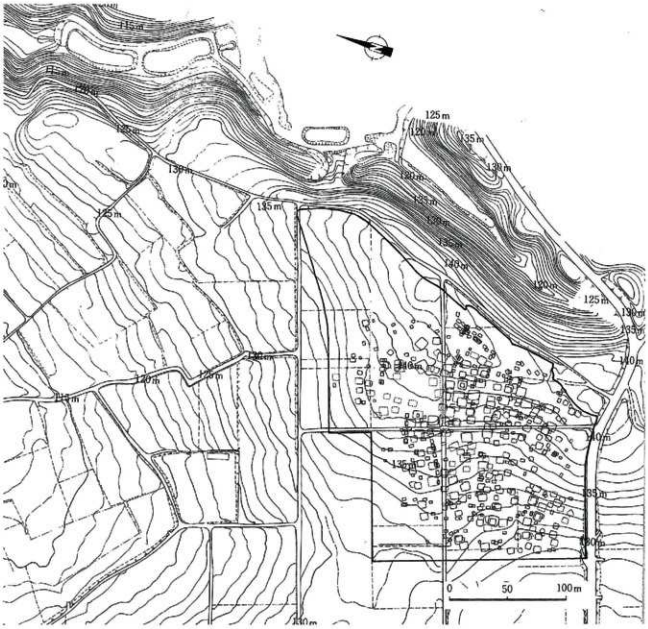
一方、部分的な調査にとどまっている陣箱遺跡では、鹿道原遺跡のように掘立柱建物が大規模に集中している個所は今のところ確認されていない。しかし、第3次調査区の西側で確認された切り合った12基の掘立柱建物群は、規模こそ小さいもののその可能性がある。個別の竪穴建物に付属するというより、共有された建物群と捕らえられるのではないか。一方で、竪穴建物に重ならない形で、単独で存在する掘立柱建物が点在する。今回の調査で確認された掘立柱建物も同様のものであろう。これらから、竪穴建物＋掘立柱建物＋空間（広場）といった一単位が抽出できる可能性が高い。何基の竪穴建物に対して1基の掘立柱建物があるのかは不明であるが、多くても3～4

基程度であろうか。

このような単位が複数集まって集落を形成していたと考えられる。その中間には、先記した12基の掘立柱建物群のように、複数の単位で複数の掘立柱建物群を共有することも想定できる。それらが集まって集落を形成していたとすると、集落は内部に二重の構造を抱えていたと想定できるのではなかろうか。

大野川中流域弥生文化の特異性

この大野川中流域は、竪穴建物における多様な柱配置、多くの1間×1間の掘立柱建物の存在、半月形に加工した多量の土器片の出土といった要素で、極めて強い地域色を有する。多様な柱配置は大野川上流域から中流域(大野原)でも見られるが、中流域のパターン全てがあるわけではない。半月形土器片加工品もやや上流まで見られる



第45図　鹿道原遺跡遺構図

が、数は少ない。1間×1間の掘立柱建物は上流域ではほとんど見られない。逆に、隣接する大分平野にはこれらの要素はほぼ入っていない。これらのことを考えると、3つの要素の中心は大野川中流域（白鹿山周辺）とすることができる。さらに、上流域から中流域（大野原）では中流域（白鹿山周辺）以上の数の弥生時代集落遺跡を調査して、まったく検出できなかった鉄器製作遺跡が2カ所で確認されていることは、上流域も含めた範囲にこの中流域から鉄器を供給していた可能性も考えねばならないだろう。

この大野川中流域（白鹿山周辺）に発した要素は、ベクトルは上流域の方向に向いているともいえる。逆に、大分平野からは安国寺式土器や後漢鏡片と仿製鏡などが中流域にもたらされている。さらに言えば、ハケ調整の「く」字口縁甕も、大分平野と共通する。そうすると、もの（文化？）のベクトルは、大分平野から上流に向けて一方的に向けられているようにも思える。しかしながら、大野川中流域の倉庫群の存在は、考古学ではとらえられないモノが、中流域に集まって来ていたことを示唆している。モノが食料としたら、それはコメなのか、畑作物なのか。まったく想像の域をでないが、中流域から上流域にかけては広く畑作地帯が展開することを考えれば、上流から逆のベクトルで下ってきた畑作物の可能性が高いのではなかろうか。

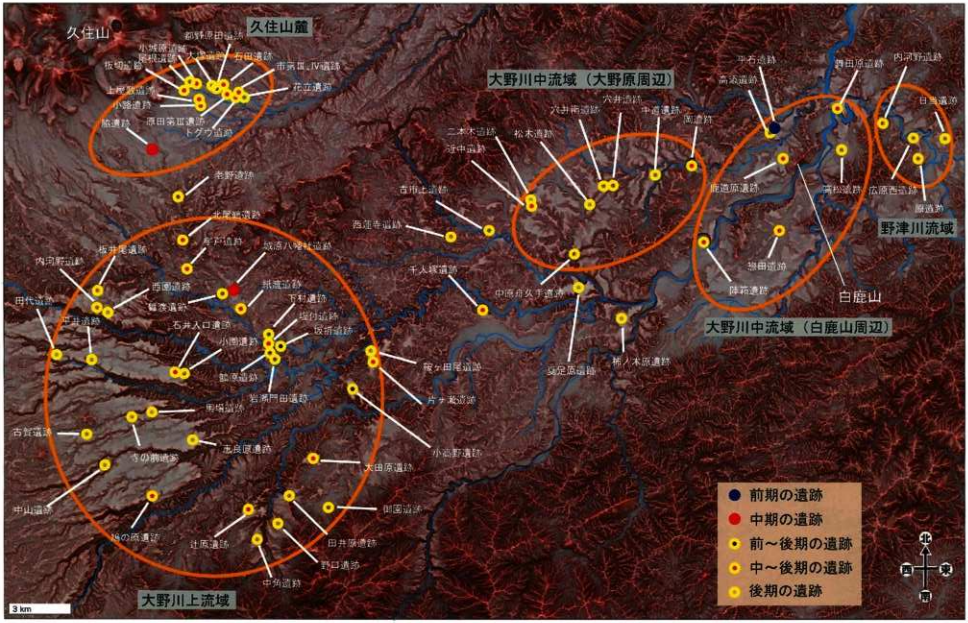
ところで、大分平野から大野川に向かうベクトルに全く乗らなかった遺物がある。それは青銅製武器型祭器である。武器型祭器、特に銅矛が北部九州文化圏を象徴する遺物だとすると、大野川中・上流域は明らかにその文化圏からは外れていることを意味する。大分平野が、その周辺の別府湾沿岸部を含め銅矛が集中的に出土し、四国への搬出ルートでもあるのに対し、あまりに対照的である。その一方で、大分平野から大野川上流域まで口縁部に櫛描波状文を有する安国寺式土器は、同様のものが分布する。このことは何を意味しているのであろうか。これには政治的、社会的、文化的、経済的など様々な要因が複雑に絡み合っているように見える。

後期弥生社会システムの形成

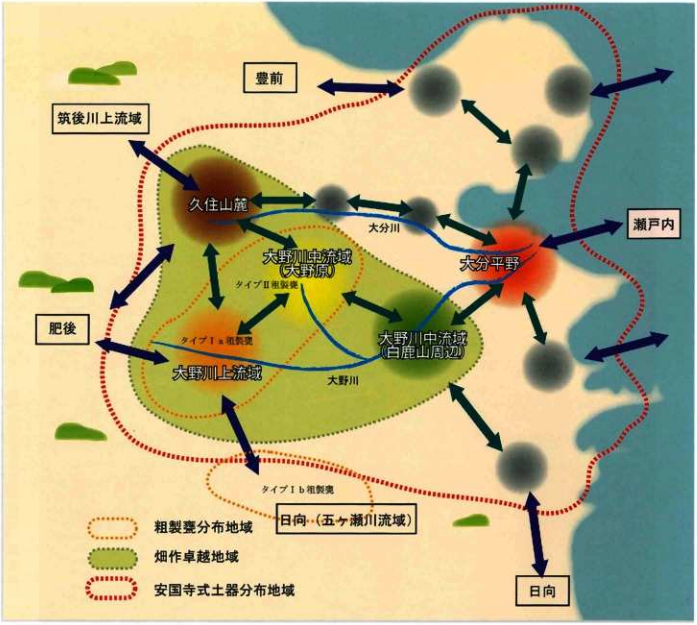
大野川中流域の弥生社会を考える上で、ポイントとなる地域がある。それはやはり大分平野に流れ下る大分川の最上流部にあたる久住地域である。ここも、久住連山の麓に高原地帯が広がる。しかし、大野川上流域とは違って、小規模河川があまり台地上と比高差が無いところを流れており、灌漑も可能なところもある（註6）。その地域でも、やはり弥生時代中期末から古墳時代前期にかけて大規模集落遺跡がいくつも見つかっており、安国寺式土器、ハケ調整「く」字口縁甕、半月形土器片加工品などの共通点を有する。最も距離的に近い大野川上流域からは工字突帯文粗製甕がわずかにもたらされ、竪穴建物の柱配置も共通する。この地域は、銅矛ではないが銅戈が2本出土している。おそらくこれは久住連山黒岳の麓を通って九重（筑後川最上流域）に抜けるルートでもたらされたものと考えられる。このルートでは、張り出し部を有する竪穴建物の平面プランが逆に玖珠にまで影響を及ぼしている（註7）。つまり、この久住地域は大分平野、大野川上流域、筑後川上流域といった地域の結節点としての役割を果たしていたのである。

今まで記してきたことを、図に示せばは第47図のようになる。「クニ」と呼べるような政治的まとまりが形成されていたのかはわからないが、大分平野、大野川中流域（白鹿山周辺）、大野川中流域（大野原）、大野川上流域、久住山麓といった少なくとも5つの個性を持った地域がお互いに緊密な関係を持ちながら、一方では瀬戸内を通じた四国や中国地方、阿蘇地域、高千穂地域、そして久住連山を越えて筑後川流域とも関係を保持していた。そして、集落が爆発的に増加する後期の後半から古墳時代前期にかけては、非常に安定的な社会システムが機能していたといえるだろう。

今後は、さらに細かな分析を加えることによって、この社会システムの具体的姿を描くことが課題であろう。



第 46 図　大野川流域の弥生時代遺跡



第 47 図　大野川流域弥生後期社会の構造

註

註 1　坪根伸也『時をかける道路』『古文化談叢』第65集　九州古文化研究会 2011

註 2　諸岡都編『陣崎遺跡（第３次調査区）』 豊後大野市教育委員会 2018

註 3　約１万㎡にはまったく遺構のない部分が広がっており、それを除くと 148㎡に１基となる。(『鹿道原』千歳村教育委員会 2001)

註 4　現在までいくつかの地点で調査されているが、今のところ大規模な弥生時代の遺跡は確認されていない。

註 5　ここでいう大野川中流域とは旧市町村名で犬飼町、千歳村、三重町になる。その中に白鹿山と呼ばれる独立峰があるので、この地域を大野川中流（白鹿山周辺）とし、従来、大野川中流域と言われていた旧大野町は、大野川中流域（大野原）と呼ぶこととする。

註 6　長野津留遺跡では、水路と考えられる溝が確認されている。(『直入地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ長野津留遺跡』直入町教育委員会 1986)

註 7　玖珠町陣ヶ台遺跡などで方形の突出部を複数有するプランの竪穴建物がわずかに出土している。(『陣ヶ台遺跡』玖珠町教育委員会 1999)

遺構一覧表

区	遺構名	前遺構名	出土遺物（刻書土器掲載分）				時　期
			土器	石器	紡錘	メンコ	
1	SH1	S-060	2				弥生後期初頭？
	SH2	S-006	1	3			弥生終末～古墳初頭
	SH3	S-150	10	7		8	弥生中期後半
	SB1	S-112					弥生後期
	SK1	S-005					弥生後期～古墳前期
	SP1	S-004	4		1		戦国？～江戸
	SP2	S-002	1		1		戦国？～江戸
2	SH4	S-250	5	2	1		弥生後期後葉～終末
	SH5	S-245	3	3			古墳前期
	SH6	S-285	1				弥生後期後葉
	SH7	S-280	2	1			弥生後期後葉
	SH8	S-220	2	1			古墳前期
	SH9	S-230	2				弥生後期
	SK2	S-290	1				弥生後期終末
	SK3	S-241					弥生後期～古墳前期
	SK4	S-237					弥生後期～古墳前期
	SK5	S-231					古墳前期
	SK6	S-232					古墳前期
	SK7	S-233	1				古墳前期
	SP3	S-201					不明
	SD1	S-240					江戸？
	SD2	S-240					不明

遺物観察表

土器

図版番号	遺物番号	区域	遺構	器種	口径（残存幅）	底高（残存高）	底部径（刻印最大径）	外面の文様・調整	内面の文様・調整	胎土				備考	注記（刻印遺構番号、取上げ番号など）
										角閃石	長石	石英	その他		
第6図	1	1区	SH1	壺	41+α			32ヲ後刷目	32ハ		多	多	多		S-060 B
第6図	2	1区	SH1	壺	73+α			外体：32ヲ・刷目	ヲ・32ヲ・ハ刷目		多	多	多	内面：32付着	S-060 SH-1 墨
第6図	3	1区	SH2	壺	142+α			指圧痕・ヲ	ヲ	多	多		多	内面：ヲ付着	S-006 7
第11図	7	1区	SH3	壺	25+α			重弧文・32ヲ	指圧痕・32ヲ	少	少	少	少		S-150 26
第11図	8	1区	SH3	壺	49+α			32ヲ・刷目突帯	32ヲ・ヲ	少	少	少	少	外面：32付着	S-150 35
第11図	9	1区	SH3	壺	53+α			32ヲ・刷目突帯・ハ	32ヲ・ヲ	少	少	少	少		S-150 12
第11図	10	1区	SH3	壺	52+α			32ヲ・刷目突帯	32ヲ	少	少	少	少	外面：32付着	S-150 28
第11図	11	1区	SH3	壺	34+α			32ヲ・ヲ・刷目突帯・沈線	32ヲ	少	少	少	少	外面：32付着	S-150
第11図	12	1区	SH3	壺	40+α			32ヲ・刷目突帯	32ヲ・ヲ	少	少	少	少	外面：32付着	S-150 13
第11図	13	1区	SH3	壺	32+α			32ヲ・刷目突帯	32ヲ・ヲ	少	少	少	少	外面：32付着	S-150 15
第11図	14	1区	SH3	壺	285+α	(15)		32ヲ・不明	ヲ	少	少	少	少		S-150 20
第11図	15	1区	SH3	壺	33+α	(35)		32ヲ	胴部不明	少	少	少	少	内面：32付着	S-150 37
第11図	16	1区	SH3	壺	42+α	(35)		ハケ・ヲ	胴部不明	少	少	少	少	内面：32付着	S-150 42
第19図	32	1区	SP1	鉢	33+α	(45)		施釉・箆磨・施釉	鉢底					内外面：黄人赤り、鉄錆系	S-0041 墨 16ヲ
第19図	33	1区	SP1	鉢	50+α									鉄錆系	S-0042 墨 16ヲ
第19図	34	1区	SP1	鉢	29+α			施釉	鉢底					鉄分部（15.5）、鉄錆系	S-0041 墨 16ヲ
第19図	35	1区	SP1	五輪火鉢	45+α			32ヲ後押型文	ヲ・32ヲ	少	少			文様：梅花文	S-0041 墨 16ヲ
第20図	37	1区	SP2	土師質火鉢	44+α			32ヲ後文様	ヲ	少	少	多	少	文様：菊花文	S-002
第23図	40	2区	SH4	壺	70+α			三角突帯貼付ヲ接32ヲ・刷目（10本/cm）	縦方板・ヲ	多	多		多	外面：泥質後赤色顔料、鉄元素顔料（11.5）	S-250 6
第23図	41	2区	SH4	鉢作り練塊	24+α			32ヲ後横軸線状文	32ヲ（7本/cm）32ヲ	少	少		少	内外面：赤色顔料	S-250 a
第23図	42	2区	SH4	壺	39+α			粘付突帯後32ヲ	胴部にて不明	多	多		多		S-250 d
第23図	43	2区	SH4	壺	(16.0)	25+α		32ヲ・ヲ（10本/cm）後32ヲ	32ヲ・32ヲ後32ハ刷目	少	少		少		S-250 d
第23図	44	2区	SH4	壺		30+α		粘付突帯・32ヲ後刷目	ヲ・ヲ32ヲ刷32ハ	少	多		少		S-250 8
第25図	48	2区	SH5	壺	(13.7)	48+α		指圧痕32ヲ・ヲ（9本/cm）後横圧32ヲ	指圧痕32ヲ・32ヲ・ヲ・ヲ（9本/cm）	少	多	多	多		S-245 32
第25図	49	2区	SH5	壺		30+α		三角突帯貼付ヲ接32ヲ・ヲ（9本/cm）	ヲ	少	少	多	少		S-245 16
第25図	50	2区	SH5	壺		70+α		ヲ（9本～10本/cm）後32ヲ・三角突帯貼付後32ヲ・32ハ	工具ヲ・指圧の色ヲ	少	多		多		S-245 C

第27図	54	2区	SH8	盌		6.5+α		特化工具による押力方向のナデ	工具ナデ	少	少			胴部縁 (12.0)	S-285 2・3
第29図	55	2区	SH7	盌		6.2+α		ナデ・EDナデ・突帯	ナデ	少	少			外面：2条の突帯あり	S-280 東側
第29図	56	2区	SH7	壺		2.8+α	2.0	ナデ	ナデ	少	少			外面：刻付帯	S-280 南側
第31図	58	2区	SH8	鉢 (12.0)	(13.0)	5.5+α		EDナデ・単線波状文	EDナデ・EDの5本/cm	多	多		少		S-220 17
第31図	59	2区	SH8	壺		5.3+α		貼付突帯後EDナデ・ハケ工具による結び・ナデ (5本/cm)	EDナデ・ナデ (5本/cm)	多	多		多		S-220 1
第35図	63	2区	SK2	鉢		2.1+α		EDナデ	EDナデ	少	少			外面：ナデ痕り	S-290
第40図	64	2区	SK7	二重口縁壺	(17.2)	6.7+α		EDナデ・貼付突帯後指圧と EDナデ・指圧のちナデ痕EDナデ	EDナデ・ナデ・EDナデ・工具ナデ・接合痕	少	少		少	復元口縁径 (11.6)	S-233 1
第43図	65	2区	ピット	壺		3.0+α		EDナデ・貼付突帯のち結び	EDナデ・結びのちナデ痕とナデ	少	多		少	外面：刻付帯	S-233
第43図	66	2区	ピット	壺		4.2+α		EDナデ方向のナデ・ナデ方向のナデ	EDナデ方向のナデ	少					S-304
第43図	67	2区	一括	壺		2.7+α		ナデ・EDナデ方向のナデ	EDナデ方向のナデ	少	少		少	外面：ナデ痕り一部残る	A7
第43図	68	2区	一括	鉢		4.6+α		EDナデ方向のナデ・三角突帯	EDナデ方向のナデ・ナデ	多	多				A11 近土(M7)
第43図	69	2区	一括	甕	(13.8)	3.4+α		EDナデ・波状文	単線ナデ	少	少	少	少	口縁部：波状文あり	A10

石器

図版番号	遺物番号	区域	遺構	種類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	注記
第8図	4	1区	SH2	磨製石鏃	粘板岩	5.0	1.8	0.5	4.6	S-006 12 炭層直上
第8図	5	1区	SH2	磨製石鏃未完成品	粘板岩	3.7	2.0	0.4	2.7	S-006 8
第8図	6	1区	SH2	台石	安山岩	38.6	26.1	16.0	18000.0	S-006 19
第11図	25	1区	SH3	磨製石鏃未成品	粘板岩	4.9	2.7	1.1	10.5	S-150 41
第11図	26	1区	SH3	ナイフ形石器	頁岩	5.1	2.5	1.15	11.6	S-150 76
第11図	27	1区	SH3	磨製石鏃未成品	粘板岩	3.05	2.2	0.5	3.3	S-150
第11図	28	1区	SH3	敲磨石	砂岩	3.7+α	5.9	1.1～1.8	59.4	S-150 32
第11図	29	1区	SH3	敲磨石	花崗岩	4.3+α	7.1	3.3	139.0	S-150 B
第11図	30	1区	SH3	打製石斧	緑泥片岩	6.55	6.0	1.35	52.0	S-150 D
第11図	31	1区	SH3	台石	安山岩	38.0	29.1	11.5	20000.0	S-150 30
第23図	39	1区	pit	砥石	凝灰石	3.65	2.0	0.6	3.9	S-148 此
第23図	46	2区	SH4	台石	安山岩	17.3	9.0+α	6.3	1270.0	S-250 3
第23図	48	2区	SH4	台石	安山岩	24.9	11.6	5.2	3050.0	S-250 11
第25図	51	2区	SH5	磨製石鏃未成品	粘板岩	4.15	2.2	0.6	6.2	S-245 24
第25図	52	2区	SH5	台石	砂岩	23.3	16.7	8.4	4300.0	S-245 21
第25図	53	2区	SH5	台石	安山岩	37.3	33.1	9.5	18500	S-245 28
第29図	57	2区	SH7	砥石	安山岩	15.5	7.1	3.5	781.8	S-280 3
第31図	60	2区	SH8	磨製石鏃	粘板岩	3.1	1.1	0.2	1.7	S-220 2

土製品

図版番号	遺物番号	区域	遺構	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	検索番号
第11図	17	1区	SH3	メンコ	6.5	4.0	0.9	30.6	貝の転用品	S-150 1
第11図	18	1区	SH3	メンコ	4.4	2.7	0.75	13.1	貝の転用品	S-250 56
第11図	19	1区	SH3	メンコ	4.4	2.5	0.8	12.3	貝の転用品	S-150 40
第11図	20	1区	SH3	メンコ	3.55	2.05	0.7	6.3	貝の転用品	S-150 73
第11図	21	1区	SH3	メンコ	2.7	2.0	0.7	3.9	貝の転用品	S-150 66
第11図	22	1区	SH3	メンコ	3.0	1.7	0.6	4.7	貝の転用品	S-150 8
第11図	23	1区	SH3	メンコ	2.5	1.4	0.6	2.8	貝の転用品	S-150 9
第11図	24	1区	SH3	メンコ	3.2	1.7	0.65	4.8	貝の転用品	S-150 10

金属製品

図版番号	遺物番号	区域	遺構	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	注記
第16図	36	1区	SP1	鉄釘	6.5	1.6	1.2	12.3		S-004 1層 M/F西側
第30図	38	1区	SP2	鉄釘	5.3+α	1.1	0.6	5.4		S-002 黒褐色土
第23図	47	2区	SH4	鉄鏃	9.2	2.4	0.3	12.0		S-250 3a 1・2

写 真 図 版

西側から見た遺跡（中央：左側は大野川で、手前から奥に向かって流れる）

東側から見た遺跡（中央やや下：奥の山は祖母・傾山系）

北西側から見た遺跡（中央：右の奥には三重町の市街地が見える）

第１調査区（左側の重機がある所）と第２調査区（右側）

第 1 調査区完掘状況

第 2 調査区完掘状況（上が北）

第１調査区西側

第１調査区完掘状況（東から）

第１調査区完掘状況（西から）

第1調査区 SH2 完掘状況（土層ベルトは残っている状態）

第 1 調査区 SH1 床面の状況、及び土層断面

第 1 調査区 SH1 貼り床除去後の状況

第 1 調査区 SH2 検出状況

第 1 調査区 SH2 貼り床の状況

第 1 調査区 SH2 貼り床除去後の状況

第 1 調査区 SH3 検出状況

第 1 調査区 SH3 遺物出土状況

第 1 調査区 SH3 土層断面

第 1 調査区 SH3 南壁の土層断面

第 1 調査区 SH3 南壁の貼り床土層断面

第 1 調査区 SH3 焼土の状況

第 1 調査区 SH3 完掘状況（東から）

第 1 調査区 SH3 完掘状況（北から）

第 1 調査区 SH3 貼り床除去後の状況（中央の一段低い部分）

第 1 調査区 SB1 完掘状況

第 1 調査区 SK1 完掘状況

第 1 調査区 SF1 完掘状況（東から）

第 1 調査区 SF2 完掘状況（最西端部分）

第 1 調査区 SF1 列石検出状況

第 1 調査区 SF1 列石検出状況 (2)

第 1 調査区 SF1 土層断面

第 1 調査区 SF1 土層断面 (2)

第 1 調査区 SF1 調査区北面土層

第 1 調査区 SF2 完掘状況

第 1 調査区 SF2 完掘状況
(西寄り部分)

第 1 調査区 SF1、SF2 完掘状況
(東から)

第２調査区西部
（貼り床除去後）

第２調査区東部
（貼り床除去後）

第２調査区完掘状況

第 2 調査区 SH4 完掘状況

第 2 調査区 SH4 貼り床除去後の状況

第 2 調査区 SH4 炉の半裁状況

第 2 調査区 SH5 炉検出状況

第 2 調査区 SH5 炉半裁状況

第 2 調査区 SH5 土層断面

第 2 調査区 SH5 完掘状況

第 2 調査区 SH5 貼り床の状況

第 2 調査区 SH5 床面除去後の状況

第 2 調査区 SH6 完掘状況

第 2 調査区 SH6 貼り床除去後の状況

第 2 調査区 SH7

第 2 調査区 SH7 土層断面

第 2 調査区 SH7 完掘状況 (3)

第 2 調査区 SH7 完掘状況

第 2 調査区 SH8 完掘状況

第 2 調査区 SH8 貼り床除去後の状況

第 2 調査区 SH9 完掘状況

第 2 調査区 SH9 炉の半裁状況

第 2 調査区 SH9 貼り床の状況

第 2 調査区 SH9 土坑の堆積状況

第 2 調査区 SH9 貼り床除去後の状況

第 2 調査区 SK2 完掘状況

第 2 調査区 SK3 半裁状況

第 2 調査区 SK3 完掘状況

第 2 調査区 SK4 土層断面

第 2 調査区 SK4 完掘状況

第 2 調査区 SK5 検出状況（SH8 の床面で確認）

第 2 調査区 SK5 完掘状況

第 2 調査区 SK7 遺物出土状況

第 2 調査区 SK6（左）、SK7（右）土層断面

第 2 調査区 SK6（奥）、SK7（手前）完掘状況

第 2 調査区 SF3 検出状況（西から）

第 2 調査区 SF3 検出状況（東から）

第 2 調査区 SF3 連続土坑検出状況

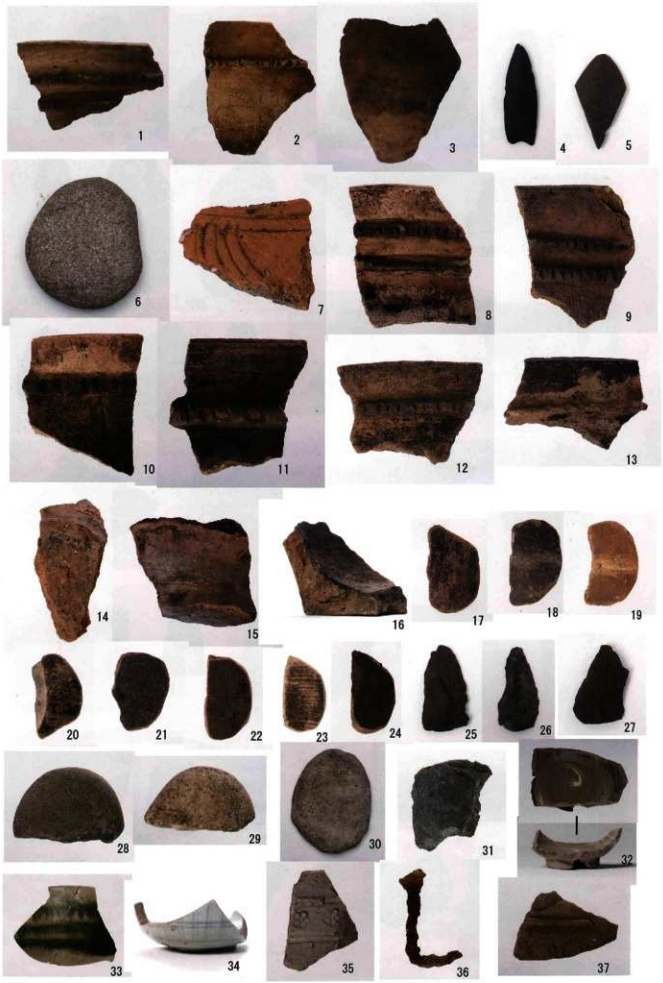
第 2 調査区 SF3 連続土坑完掘状況

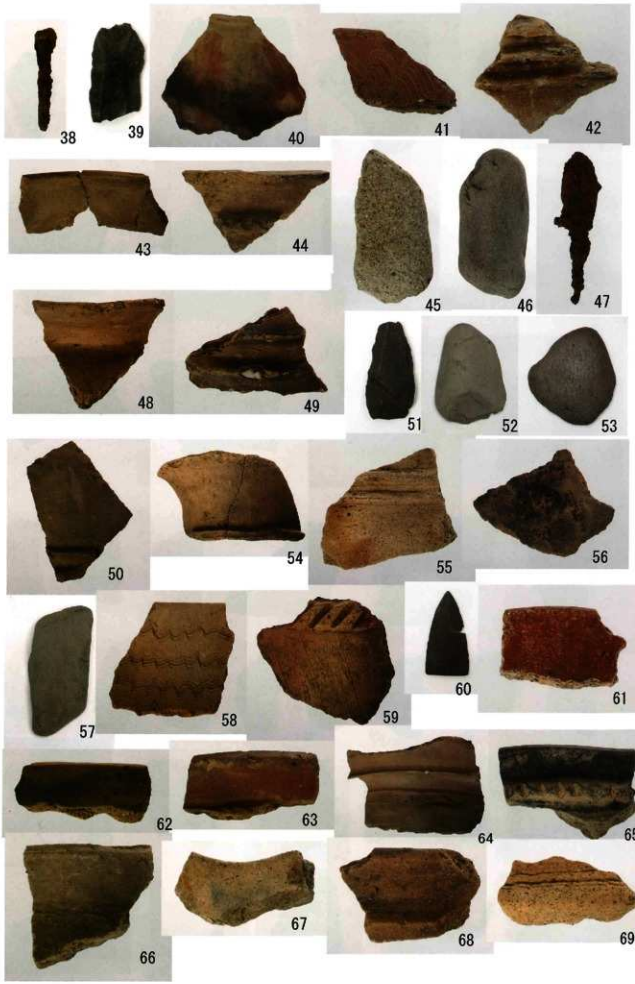
第 2 調査区 SF3 土層断面

第 2 調査区 SF3 完掘状況

第 2 調査区（左）、SD2（右）検出状況

第 2 調査区（左）、SD2（右）完掘状況


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37


38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
51
52
53
50
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69

報 告 書 抄 録

ふりがな	じんばこいせき　だいよじちょうさ
書名	陣箱遺跡（第４次調査）
副書名	県道百枝大野線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	小柳　和宏
編集機関	大分県立埋蔵文化財センター
所在地	〒870-0152　大分市牧緑町1-61
発行年月日	2021年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
じんばこいせき 陣箱遺跡	ぶんごおおのしみえまち 豊後大野市三重町 おおあざももえだあざじんばこ 大字百枝字陣箱 ほか	212	037	33°0′1″	131°34′39″	R1.10.21 ～R2.1.17	630 ㎡	道路工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
陣箱遺跡	集落等	弥生 古墳 中～近世	竪穴建物 土坑 道路跡	土器、石器、 鉄器	

要約

大野川中流域の白鹿山周辺に点在する弥生時代集落跡の中では、最大規模と考えられる陣箱遺跡のほぼ中央部あたりが今回の調査地点になる。弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけての竪穴建物９基、土坑７基、掘立柱建物１基など、そして中世後半から近世にかけての道路跡３本などを調査した。弥生時代中期後半の建物の１基は花弁形住居である。道路跡は、掘り込みを伴う、いわゆる「豊後大分型道路」に分類されるものである。

陣 箱 遺 跡（第４次調査）
県道百枝大野線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第17集
令和３年３月31日

編集・発行　大分県立埋蔵文化財センター
〒870-0152　大分市牧緑町 1-61
TEL 097(552)0077

印　　刷　三恵印刷株式会社
〒870-0941　大分市下郡 3055-8
TEL 097(567)1155